IS〈インフィニット・ストラトス〉 天の悪戯

つかちー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉　天の悪戯

【Ｎコード】
Ｎ２０１０Ｓ

【作者名】
つかちー

【あらすじ】
たとえ居たとしても出てこない神様は居ないのと一緒！つまり世界一の天才であり世界を自由に操れるこの束様こそがこの世界の神様なのだー！！ｂｙ束
※束さんは主人公ではありません。

チェンジ・ワールド―お目覚めはいかが？―（前書き）

この小説が自分にとって、そして読者にとって、意味のある物になることを願います。

チェンジ・ワールド―お目覚めはいかが？―

「ここは何処だ……」

目が覚めて知らない場所にいる。現実（リアル）ではあり得ない事、いわば二次元的なお約束。

「実際体験すると……何というか怖いもんだな」

何よりもまず記憶が無い。自分がこんな所にいる理由が分からないから精神的なダメージは大きい。

「……とりあえずは状況整理かな？」

まずは場所……周りには機械チックな物ばかり。イメージとしては何かの研究所と言った所だろうか？

ここが病室ならまだ理解できる範囲なんだけどなぁ。

次は自分の状態……無駄にファンシーなパジャマのまんま。どうやら寝ている間にここに来たらしい。

今、自分に残っている記憶は自分の部屋で普通に眠りについた記憶なのでつまり……

「寝ている間に運ばれた？」

しかし、途中で起きないものかね？いや、それより何でそんな事を？

「やあやあ、お早う。元気かい？」

寝起きな上に混乱した頭で考えを巡らせていたところ背後から声がした。びっくりして振り返るとそこには２０代くらいの女性がいた。

「ようこそ。私の世界へ。」

天才の篠ノ之束（しののたばね）さんだよ。彼女はそう名乗った上で懇切丁寧に説明してくれた。

「つまり、要約するとこういう事ですね？」

1．篠ノ之束は天才である。
2．机上の空論と馬鹿にされてた別世界についての研究に浪漫を感じた。
3．暇つぶし程度に実験していたらまさかの成功。

「概ねそんな感じだね！」
おっとりとした垂れ目。長い髪。グラマーな体型。奇抜なファッション。そんな見た目な束さんは元気な人のようだ。

「……帰れるんですか？」
「この天才束さんに不可能は無い！って言いたいけど……今回のことは完全に偶然の産物でしかないんだよ」
「……」
「しかも装置も完全に逝っちゃってデータも……世界移動だけなら何とかなっても、いくつあるやもしれない世界の中から君の世界に帰れる保証は無いんだ……」

最初はハイテンションの固まりのようだった束さんは完全に落ち

込んでしまった。
　まだ会ってから5分も経って無いけれどこの人にこんな顔は似合わないと思った。

「別にいいですよ」
「え？」
「別に帰れなくてもいいですよ。死んだ訳じゃ無いんだし」
「でも……」
　束さんは戸惑ったような顔をしている。罪の意識を感じているからだろう。
「だって束さんは悪くないじゃない」
「いいの？大変な事だよ？」
「大丈夫ですよ。それに束さんならその内何とかできるでしょう？」
　根拠は無いけど、そう思えた。そう思わせる何かが束さんにはあると思う。それに――
「――それは勿論。」
　その目には自信が満ちあふれていた。

「あ、まだ自己紹介してないよ」
　束さんの回復は早かった。この人のテンションゲージは１００以上か０以下。もはやゲージでは無いか。
「アスカです。この前１５歳になりました」
「おぉ箒ちゃんやいくんと同い年！運命感じちゃうね！？名字は？」
　いや、誰ですか。
「……苦手なんです名字」
「あり、トラウマ？まあいいよ、どうせ戸籍とかの都合つけるため

に私の養子扱いにするつもりだったし、君も今日から篠ノ之だー」
　それはこれからもこのテンションに付き合っていかなければならないってことか。それ以外に選択肢も無いんだけど。
「あ、ありがとうございます」
「身内だから敬語も禁止ー！」
「は……うん。ありがとう」
　優しさが心に染みる。惚れちゃいそう。

「うむうむ。それとこれからの生活を豊かにするためにＩＳもプレゼントしちゃう！」
「ＩＳ？」
　聞き慣れない単語だ。生活を豊かに。……便利アイテム？
「ＩＳとは、正式名称『インフィニット・ストラトス』……まあ、現状は女性専用飛行パワードスーツってとこだね。勿論私が作りました」
　褒めて褒めてーと言いたげな表情だが……
「いや、要らないよ」
「何で！？」
　あり得ないっ！！って顔されてもよく分からないし。
「そもそも俺、男だよ？」
「嘘だ！？転移装置の理論上ＩＳ適正が無い人の筈がないし。それ以上にどっからどう見てもアスカちゃんは女の子じゃないか！」

　――グサッ！トラウマ直撃っ！

「……ぐっ、確かに女っぽく見えるかもしれませんが確かに男です！」
　確かに身長は低いよ！体も細いよ！声変わりもしてないよ！第一次成長期にスルーされたよ！そのことで散々馬鹿にされたよ！友達もなかなかできなかったんだよ！元の世界に帰れなくていいかな？

っとか思っちゃう原因だよ！くっそー！（泣）

「だったら確かめてみよう」

は？そう口に出すよりも速く束さんの手がこちらの胸に当てられた。そして揉んだ。

「んあっ……」

なんとも言えない変な感覚。

「ふむ……」

束さんには躊躇いと言う物が無いらしい。そして右手は股間に差し伸べられる。

「あっ……」

あるはずの感触は無く。代わりに変な感覚が体を襲う。それは衝撃的な事実を物語っていた。

どうやら俺の体は女になってしまったらしい。

チェンジ・ワールド―お目覚めはいかが？―（後書き）

主人公の容姿はまんま女の子。イメージは秀吉（バカテス）詳細はそのうち。

ファンシーなパジャマは姉のお下がり。勿論女物。

サブタイトルは原作3巻の海に着いたら11時！とかその境界線（オーシャンズ・イレブン）（シン・レッド・ライン）の上に立ちなんかが好きなんで頑張って考えて付けたい。

ニュー・ストレス―入学初日の緊張感―（前書き）

2話目で早くも（早すぎ）サブタイに悩む。

ニュー・ストレス―入学初日の緊張感―

一年一組の教室は緊張感に支配されていた。

ＩＳ学園入学初日。緊張感の原因は単純。クラス３０名の内、一人だけの男子、織斑一夏の存在だ。

織斑一夏が悪い訳ではない。ただ、世界中の男の中でただ一人ＩＳを動かせる。だからこのＩＳ学園にいる。

本来女子しか居ない場所に男子一人で。

僕も男子だったがもはや過去の話。半年前に女の仲間入り。最初は戸惑ったが三ヶ月くらいで慣れた、と言うより諦めた。

織斑一夏もその内慣れるだろう。人間は慣れる生物だ。言い換えるなら適応する生物である。そうやって今の姿に至ったのだから。

それよりも僕には緊張の種がもう一つある。真後ろ席の生徒、篠ノ之箒だ。

彼女は、織斑一夏を気にすると同時に僕の方も気にしている。仕方ないことだろう。

現在、副担任の山田真耶先生の進行で自己紹介が行われている。次はいよいよ織斑一夏の番のようだ。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

そう言って頭を下げる織斑一夏。いい加減面倒だな、もう一夏でいいか。

「……」

なんだ、もう終わりか？もっと喋れって雰囲気だぞ？
「……」
なんだか焦っているようだ。あ、こっちを見た。こっちって言うか箒ちゃんの方かな？
しかし、助け船はでず。一夏は覚悟を決めるように一つ深呼吸をした。
「以上です」
……心中お察しするよ。きっといいことあるさ。

と、そこで見たことのある人（写真と映像でだけど）が教室に入ってきてイキナリ一夏の頭をぶっ叩く。痛そう。
「げえっ、関羽！？」
一夏はそう言ってまた叩かれた。スゴい音だ、思わずビクッっとしてしまいそうだ。
「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」
えーと、あの人は束姉（たばねえ）のお気に入りの……

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠１５才を１６才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが。私の言うことは聞け。いいな。」
随分乱暴な自己紹介が終わると黄色い歓声が響いた。
「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」
うわぁ、本当にうっとうしそう。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」
「いや、千冬姉、俺は――」

パアンッ！
「織斑先生と呼べ」
「……はい、織斑先生」
３度目の出席簿（スマッシュ）。あれだけは喰らいたくない。

ヒソヒソと周囲の話声が聞こえる。２人が兄弟であるという内容だ。中には代わって欲しいとか……叩かれるのがいいのか？
そうこうしてる内にチャイムが鳴った。
「さあ、ＳＨＲ（ショートホームルーム）は終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半年で覚えて貰う。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」
鬼か、アンタは。

……それと一夏はいつまで立ってんのさ。

一時間目が終わった。授業の内容は復習にもならない。半年間、束姉の所にいたせいだ。悪い事じゃないけどね。
一夏と箒ちゃんに接触しようと思ったが二人で廊下に。旧知の仲らしいから今回は見送り。

二時間目も終わった。一夏が授業が全然わからないとか言ってたが大丈夫だろうか？
と、またも僕と一夏の間に人。金髪ロールの髪型がすばらしい。

もはやかっこよく見える。
セシリア・オルコットとかイギリスとか代表候補生とか言ってるが長くなりそうなので今回も断念。

そして三時間目。
「クラス対抗戦に出る代表者を決める」
織斑先生が教壇に立ってそう言った。簡単に言うと委員長ポジションらしい。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」
早速候補に挙がる一夏。目立つからねぇ。
しかし、それは面白くないと先ほどのセシリア・オルコットが待ったをかけた。
長々しい台詞だったが要するに「代表は私にこそ相応しい」だそうだ。ここまで言い切れるのは尊敬に値する。普通なら滑稽に見えるかもしれないが彼女は違う。美人は特なんだよねぇ。
勿論、一夏も黙っては居ない。売り言葉に買い言葉。その結果――

「決闘ですわ！」
「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

二人とも単純なんだ。けど代表候補がそんな単純でいいのか？

「さて、話はまとまったか？」
黙って成り行きを見ていた織斑先生は頃合いを見て割って入る。
ハンデ無しの決闘で決まりのようだ。
「ところで篠ノ之。お前はいいのか？」
「はい？」
おおっと、今の反応は僕じゃないよ、箒ちゃんだよ。念のため。

「ああ、悪い。二人居るのか。箒じゃない明日香の方だ。」
「何でしょう？」
そんな、突然振られても困るよ。ねぇ箒ちゃん？
「お前も専用機持ちだろう？」
ざわざわっと教室がにわかに騒がしくなる。セシリアも「なぁっ！？」とか言ってるし。
「そうですね……先生も機体のデータ見てるんでしょう？今はまだ戦えませんし、今回はパスします。けど、織斑くんの訓練に付き合います。今のままじゃ勝負にならないと思うんで。折角の決闘なんだし、いい勝負して貰わないと」

「ふっ、なるほどな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」
一夏の顔には『納得いかない』と書いてあるがとりあえず授業だと、渋々席に着いてテキストを開いた。

そんな事よりも今は背後で殺気を放っている二人が気になる。次の休み時間が怖いなぁ。

ニュー・ストレス―入学初日の緊張感―（後書き）

僕？

「可愛い女の子が俺とか言っちゃダメ！ん、僕？僕ならセーフ！！」

束姉（たばねえ）？

「いっくんはちぃーちゃんのこと千冬姉って呼ぶの！だから私もそう呼んで！！」

箒ちゃん？

「箒ちゃんは可愛いんだよ～（以下略）！！」

しつこく強要しました。ある意味洗脳です。

ハロー・アフタヌーン―初めましての午後―（前書き）

何とも複雑なご関係で……

ところで以外と難しいのは寮の部屋割り。どーしよ。

ハロー・アフタヌーン―初めましての午後―

「勝負にならないってどういう事だ？」

昼休みに入るやいなや一夏の方からアプローチをかけてきた。三時間目の後の休み時間に来なかったから、こっちから行こうと思ってたんだけどね。手間が省けた。

一夏は机の前でこちらの目をじっと見ている。別に逃げないって。

「いいよ、説明する。学食に行こうか。箒ちゃんと一緒に。」

後ろの席で様子を伺っていた箒ちゃんが驚いたのが分かる。別に特殊能力でも何でもない。椅子がガタタンッ！ってなっただけだし。

「ちょっと大事な話だから相席は勘弁してね」

そう言ってギャラリーの方々には多少距離をとって貰った。動物園のパンダ状態だが仕方ない。今の一夏はパンダ以上の希少生物だ。

「さて、まずは自己紹介と行こうか。僕は篠ノ之明日香」

「……織斑一夏だ」

「……篠ノ之箒だ」

警戒心剥き出しと言ったようすの二人。まずはその辺を何とかしないと。

「まあ、二人の事はよ～く知っているよ。散々聞かされたからね」

「……誰から聞かされたんだ？」

「勿論。篠ノ之束からだよ。」

……あれ、警戒心強まった？なんで？

「まず二人に言っておくよ。僕は君たちに嘘は付かない。隠し事せずに包み隠さず全て話す。」
「わかった。話してくれ」
一夏が答え。箒ちゃんがそれに頷く。

「簡単に話すとね。僕には行き場が無かったんだ。そこを束姉に拾われた。大体半年前の話だ」
「束姉(たばねえ)……」
箒ちゃんそこに食いつくんだ……いや、当然かな？
「……そう呼ぶように言われたんだ。書類上は養子。娘扱いだけど娘より妹がいいって」
「束さんらしい……」
「それに娘だったら箒ちゃんは叔母さんだしね」
「なぁっ！？」
「だから、妹。箒ちゃんより遅生まれだから三女」

ここらで会話を一端止める。冷めたら勿体ないよ。と言ってご飯を勧める。
「一方的に喋るから食べながら聞いてね」
そう前置きをしてから本題に入る。主に代表候補生、そして専用機の事である。
きちんと前置きをしておいたので異論反論は認めない。むしろ口を挟ませない速度で一夏を責める。
いかに無知で無謀であったかを。

「ふぅ、こんなところかな？」
しっかりと昼食を取り終えた頃に話は終わった。一夏は神妙な顔をしている。
「何か言いたいことはある？」

そう訪ねると一夏は真剣な眼差しをして言った。
「確かに、俺が馬鹿だったのは認める。けど、男に二言は無い。止めないでくれ」
「何言ってんだよ。止めろなんて言ってないだろ？」
「え、でもお前あんだけ言ってて……」
「むしろ止めたら駄目だろ。僕が言いたいのは一週間は有効に使えってことだ。それに――」
「それに……？」
頬が緩むのがわかる。まさか自分がこんな気障な言葉を言うことになるとは……
「男を見せろよ。織斑一夏。」
「そうだ、一夏！お前なら出来る！」
「二人とも……」

「と、感動の場面の前に早くしないと五時間目に間に合わないぞ」
何とも締まらない話だ。ギャラリーももうほとんど居ない。急いで教室へ向かう。
「あー、そうだ。大事なことを言い忘れてた」
「何だ明日香？」
「もうあれだよな、友達でいいよな」
「ああ、当たり前だろ」
「いや、やっぱり友達なんて生温いね。もはや親友だな。絶対、何があっても、未来永劫だぞ？漢と漢の誓いって奴だ」
「変な奴だな……お前女だろ？別にいいんだけどさ」
「変で結構。男友達と付き合う気分で接してくれ」

よし、これで大丈夫だろう……多分。早く友情フラグ立てとかないとねぇ。

放課後、特にすることもなかったのでサッサと寮に帰る。
部活には今のところ興味無いし、初日を終えた一夏はグロッキーだったので放っておいた。あんな状態じゃどうにもならない。代わりに明日からは必死に頑張ってもらう。
寮の部屋は洋風のつくりだった。何故か無駄に高そうな家具とかがある。後、二つあるベットの片方だけが大きい。
荷物は机に置いて椅子に腰掛ける。それから首に巻いたチョーカーを撫でる。黒いそれは飾りの一つも無くただそこに巻かれている。

――ガチャッ

「「あ」」
ノックもせずに部屋に入ってきたのだから同室の子だ。そう思って入り口に目を向けるとそこにはセシリア・オルコットがいた。イギリスの代表候補生にして専用機持ち。自称エリートの金髪縦ロールだ。

「あなた、探していましてよ！」
イキナリ怒られた。酷い、なんで？
「専用機を持ってるって……どこの代表候補生ですか！？」
「いや、代表候補生じゃ無いんだけどね」
「嘘おっしゃい！ならなんで専用機なんて物をお持ちなんですか！？」
「あーいや、それは身内が……」
……

高校初日でなんだかんだと結構疲れているのをこのとき実感した。
もっとも、ゆっくりと眠れたのはセシリアの追求を適当にあしらい続けたせいで大分遅い時間になってしまった。

別に素直に教えても良かったのだがセシリアが面白い反応を見せるのでついやってしまった。
どうせそのうち分かることだし問題無いと思うが。

それにまだ初日。時間はたっぷりとある。
今日は一日がとても長かったような気がする。
こんな日が続くのかなぁと想像すると自然と笑ってしまう自分が居ることに気づいた。

ハロー・アフタヌーン―初めましての午後―（後書き）

問題の部屋割はセシリアと同室。特に二人部屋の表現が無かったからです。

同じ頃。箒は木刀を振り回しています。

なぜ、みんなアッサリと名前呼び？

名字がキライだったからです。呼ぶときは出来るだけ名前で。そんなポリシー。

スリー・シスターズ―姉と彼女と僕と―（前書き）

主人公は男のようで女のようで……

どうやら一夏には専用機が与えられるらしい。
そんな言葉が織斑先生から告げられたのは四時間目が始まる前だった。

自分も専用機を持っているのでいまいち実感に欠けるが、一般的に見ればスゴいことだ。
特別待遇は伊達では無い。まさに主人公の立ち位置だ。その内面倒ごとに巻き込まれるんじゃ無いだろうか。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」
一夏がＩＳの教科書の六ページを読み上げた中にあったその名前。
その事に関しては聞かれるだろうと覚悟していた。

「そうだ、篠ノ之箒は妹だ明日香の方は……」
チラリとこちらを見る織斑先生。気遣いも出来るいい先生だ。基本は鬼のようだが。
「正式には養子ですけど妹扱いでいいです」
「だそうだ」

「えええええーっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が三人もいる！」
その事についてはもはや作為を感じるよ。
「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さん達も天才だったりする！？今度ＩＳの操縦教えてよっ」
「篠ノ之さんって二人いるし名前で呼んでもいいよね？」
「箒さんと明日香さんも姉妹になるの？」
集まってくる女子。一夏の気持ちがほんのり分かる。これが常時は辛いだろう。

「あの人は関係ない！」
箒ちゃんが大声を上げた。周りのみんなも呆然としている。
「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない。それに……明日香さんとは昨日初めて会ったんだ」
そう言ってそっぽを向いてしまう箒ちゃん。
「……もう授業だから話は後でいい？」
そう言うと困惑気味だったクラスメイトは席に戻っていった。
「さて、授業をはじめるぞ。山田先生、号令」
「は、はい！」

一生懸命授業をしている山田先生には悪いが、授業は全く耳に入って来なかった。
授業の間、箒ちゃんと親しくなりたいとずっと考えていた。

昼休み。
セシリアと一悶着あった後の一夏が箒ちゃんを連れていった。学食に行くようだ。
箒ちゃんは任せよう。一夏の方が親しいし。

教室に残っているグループに近づく。弁当を作って来ているようだ。
「ちょっといいかな？」
「なんですか、明日香さん？」
「箒ちゃんのこと何だけど……」
そう言うと少し困った顔をした女の子。
「僕が言うのも変だけど、ゴメンね。箒ちゃんを嫌わないであげて」
目の前の子と話すには少し大きめの声だ。遠巻きに聞いてる子にも聞こえるように。
「優秀過ぎる姉といつも比べられたりするけど、箒ちゃんは普通の子なんだ。ちょっぴり不器用だけど、とってもいい子だって束姉も言ってた。だからお願い。」

誰も、何も言わなかった。ただ一人を除いて。
「あ～、わかるよ～。うんうん。ゆ～しゅ～なお姉ちゃんがいると苦労するよね～」
そう、のんびりと言ったのは遠巻きの一人。
「僕も箒ちゃんと、みんなと仲良くしたいからさ。ここにいない人にも伝えて欲しいんだ」
さらに追い打ちをかける。前の僕にはこんな事は言えなかっただろう。
僕も変わったのか。それとも変わろうとしているのか。
「う～ん。私と～あなたは～友達？」
「え？うん友達になってくれるなら。え～と……」
「布仏本音だよ～。アスリン～」
「ア、アスリン？」
「そうだよ～あすかだから、アスリン～。変かな～？」
正直微妙な所。他にないかな？

「でもそう言うことならまかせて～」
「ありがとう本音ちゃん」
「まっかせなさ～い、おともだちの頼みだも～ん」
そう言ってこっちの世界の二人目の友達はのほほんと笑った。

「鍛え直す！ＩＳ以前の問題だ！これから毎日、放課後三時間、私が稽古を付けてやる！」
「え。それはちょっと長いような――ていうかＩＳのことをだな」
「だから、それ以前の問題だと言っている！」
箒ちゃんは元気そうなので安心した。一夏には犠牲になって貰おう。
どうせ専用機はまだ来ないのだから、ＩＳは専用機が来てから訓練すればいい。
今の内に箒ちゃんと仲良くなる作戦（プラン）を練っておこう。

スリー・シスターズ―姉と彼女と僕と―（後書き）

まさかの、のほほんさん。
自分でも吃驚です。

アンダー・ワン―夢日記その一――（前書き）

オリジナルＩＳはまだ出せそうもありません。

と言うかどこで出そう……

アンダー・ワン―夢日記その一―

時刻は朝の五時半。
目覚ましよりだいぶ早く起きてしまった。

こんな時間だが机に向かう。日記を書くためだ。
セシリアはまだ寝ているのでスタンドライトだけをつける。そしてノートパソコンを開く。
実はこのノートパソコンは束姉特製で素晴らしいスペックを誇るのだが今は関係ない。

別に普段から日記を書いている訳では無い。寝ている間に見た夢を書き留めるのだ。
勿論そんなメルヘンな趣味がある訳でも無い。
理由は首に巻かれたチョーカーにある。正しく言えば待機状態のＩＳなのだが。

このＩＳは現在『最適化（フィッティング）』を行っている。
本来『最適化』は三十分程度で終了、その後『一時移行（ファースト・シフト）』することでＩＳは専用機となる。
しかしこのＩＳは違う。簡単に言ってしまえば特別製だからだそうだ。

束姉にどんなＩＳがいいか聞かれたときうまく言葉に出来なかった。
アイデア自体はあった。むしろありすぎてまとまらなかったのだ。

元の世界ではそこそこオタクだったからかもしれない。
本が好きだったし、コミニュケーション能力は残念としか言えなかった。

僕が色々考えてると突然束姉が「ビビッとキターー！」と言って作業に入ってしまった。
なにかヒントになる物があったらしいがそれが何かは教えてくれなかった。
そうやって完成したＩＳは『一時移行』していない。
束姉は問題ないと胸を張って言った。
「夢に見ていてね君の最高の相棒を。目が覚めたらおはようって言ってあげて。それから名前も付けてあげるんだよ」
じゃあ、と名前を考えようとしたら止められた。名前を付けるのは『一時移行』した時にだそうだ。

それからしばらくして変な夢を見るようになった。
束姉に話すと、それもＩＳに関係することだというが、詳しく説明されても全く理解できなかった。
しかしそれ以降覚えている限り夢の内容を書き留めるようにしている。

さて、今回の夢の内容は何だっただろうか？
……もともとハッキリと覚えているものでも無いが、今回はうっかり回想モードに入ってしまった為に大部分を忘れてしまったようだ。
それもよくあることだ。そんなときはイメージだけでも、抽象的な物でもいい。
……悲しい気持ちになった気がする。

それと恐怖だろうか？不安だろうか？その辺も曖昧だ。
誰かが泣いていた。自分だったのか、そうじゃないのか……

「う～ん」
考えても思い出せないのは仕方ない。
メモには『とても悲しい夢』と打ち込みタイトルに日付付けて保存する。

「それにしても……」
いままでみた夢とは何かが違っていた気がする。
何が違うのかはいくら考えても分からなかった。

アンダー・ワン―夢日記その一―（後書き）

ＩＳの名前はまだ決まってません。

……あんまり後書きって書くこと無いね。

ファースト・バトル―代表決定戦―（前書き）

主人公はまだ戦いませんが……

ファースト・バトル―代表決定戦―

「ＩＳの事を教えてくれる話はどうなったんだ？」
「……」
「目　を　そ　ら　す　な」

どうやら箒ちゃんと一夏の仲はある程度回復したようだ。六日間みっちり訓練していたからのようだから、僕の（箒ちゃんと仲良くなるための）作戦の参考にしよう。

「し、仕方ないだろう。お前のＩＳもなかったのだから」
「まあ、そうだけど――じゃない！知識とか基本的なこととか、あっただろ！」
「……」
「目　を　そ　ら　す　な　っ」
むぅ。元々幼馴染みだったからって、たった一週間で……羨ましい。
「まあまあ、一夏。落ち着きなよ」
「あ、ああ……と言うか明日香。お前も教えてくれるんじゃ無かったのか！？」
それはその通りだけれども、箒ちゃんと訓練してたし、それに――
「僕、人に教えるの苦手だし」
「はあ！？」
「来ました！織斑君の専用機！」
そう言ってピットに入ってきたのは山田先生だ。いつも通りあたふたしている。
「織斑、すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶっつけ本番で物にしろ」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えて見せろ。一夏」
「え？え？なん……」
「「「早く！」」」
女性陣の勢いに押されまくりの一夏。
一夏の前、ピットの搬入口はゆっくりと開き、白き機体が現れた。

「大丈夫、千冬姉。いける」
「そうか」
百式を身に纏った一夏は、先ほどの狼狽えた姿を感じさせなかった。どうやら心配は無用の様だ。
「一夏」
「なんだ？」
「ＩＳのついて、僕から言えることは一つだけだ」
結構恥ずかしい台詞だが今の自分なら言える。
「ＩＳを信じろ。自分がしたいと思ったことを実現してくれる。自分には出来ると言い聞かせろ。大抵のことはＩＳが叶えてくれる」
「うん、どういう事だ？」
「……自信を持ってれば大丈夫って事だ」
「ああ、分かった」
今ので本当にわかったのかよ。
「箒」
「な、なんだ？」
「行って来る」
「あ……ああ。勝ってこい」
箒ちゃんの言葉に頷いて一夏がゲートに向かう。
……今のって死亡フラグ何じゃね？

「篠ノ之明日香。あのアドバイスは極論過ぎるな」
「そうですか？」
「ああ、専用機持ちだからと言って、お前に他の生徒を任せられ

んな」
「そこまでですか……」
「機体に頼り切るのは良くない。お前自身非弱そうだし重点的に鍛えてやる。感謝しろ。」
「あ、ありがとうございます……」
まさかこんな事になるなんて……一夏のせいだー！

一夏の戦況はあまりいいものでは無かった。
中距離戦仕様のセシリアのＩＳ『ブルー・ティアーズ』の狙撃は近距離装備しか持たない一夏は相性が悪かった。
一夏はレーザーライフルと四機のＢＴビットからの狙撃を三十分近く避け続けたが、もう残りエネルギーは後わずかとなっている。
このままではいずれ削り切られるだろう。

しかし一夏もこのまま黙ってやられるつもりは無いらしい。ライフルに向かってタックルをかますと言う無茶苦茶な動きで攻撃を避ける。
セシリアは即座に距離を取ってビットによる攻撃を仕掛けたが、一夏はその動きを読んでいた。
ビットが一機落とされる。
確かにビットは優秀な兵器だが、それを扱うのも相当な技量を必要とする。
それを使いこなしているセシリアは十分スゴい。代表候補生の名は伊達では無かった。

しかし、そんなセシリアでもビットを完全に使いこなしている訳では無い。二つの弱点がある。
一つ目はビットの操作に集中すると他の事が出来なくなる事。

二つ目はビットの動きがパターン化している事。
三次元空間認識、攻撃のタイミングなどなど、それらを同時に思考しなければならないのだから、余計な事は考える余裕はないのだろう。
ビットのパターン化も無意識の内に情報処理を簡略化した結果だ。
もっとも所見で戦いながら弱点に気づくかどうかは戦闘センスの問われるところ。
それを一夏はやってのけた。二十七分間攻撃を避け続けて、勝機を見出して見せたのだ。
四機あったビットは残り二機に数を減らしていた。

「あの馬鹿者。浮かれているな」
織斑先生は忌々しげな顔で言った。
「えっ？どうしてわかるんですか？」
「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう。あれは、あいつの昔からのクセだ。あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」
「へぇぇぇ……。さすがご姉弟ですねー。そんな細かいことまでわかるなんて」
「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな……」
「あー、照れてるんですかー？照れてるんですって、いたたたたっ！！ヘッドロックはちょっとーーっ！？」
「私はからかわれるのが嫌いだ」
「はっ、はいっ！わかりました！わかりましたから、離し――あうううっ！」
織斑先生と山田先生は妙に賑やかだが箒ちゃんはそんな様子は気にも止めていないようだった。心なしか表情も険しい。
「心配？」

思わずそう問いかけていた。
「だ、誰が心配などしているものか！」
「じゃあ、信じてる？」
「……ッ！あ、ああ」
「そっか」
恥ずかしそうでぎこちない返事だった。けど嘘は感じられない。
「なら大丈夫だよ。最後まで信じてあげよう」
画面上の一夏は三機目、四機目のビットを落とした所だった。

一夏の攻撃が入ると思われたが、そう簡単には行かなかった。
『ブルー・ティアーズ』奥の手だろう。アーマーから分離したミサイルが炸裂。一夏の姿は爆煙に飲み込まれてしまう。
「一夏っ……！」
箒ちゃんが声を上げていた。
かく言う僕も心中穏やかじゃ無かった。そんなアッサリやられるのかよっ！
「――ふん。機体に救われたな、馬鹿者」
織斑先生がそう呟いたとき、黒煙の中から純白の機体が現れる。
『初期化（フォーマット）』と『最適化（フィッティング）』が完了して一次移行（ファースト・シフト）したのだ。
――つまりあれが『白式』の真の姿。

見た目も動きも今までとは全然違う。それが今の『白式』の第一印象だ。
セシリアが再度放ったミサイルビットを一夏は楽々と切り落とし、セシリアに向かって飛ぶ。
一夏の持つ近接ブレードが光り輝き、止めの一太刀が振るわれようとしたとき。決着を告げるブザーが鳴り響いた。
『試合終了。勝者――セシリア・オルコット』

こうして一夏はクラス代表決定戦に負けた。

ファースト・バトル―代表決定戦―（後書き）

やあやあ皆さんごきげんようみんなのアイドル束さんだよ！
ん？どうしてここにいるのかって？
それは暇だったからハッキングしたのさ！
まあ、細かいことは気にしないの。
今回は明日香ちゃんの性格についてお話するよ！
なんかちぐはぐで変な感じがするけどなんで？って聞いたら。
「束姉と一緒に住んでたからだよ」
って返されたんだ。どういう意味だー！

さて、このコーナーでは質問などを待っています。
この束様に聞いてみたいことがあればじゃんじゃん質問してね！
それじゃあ、またね～

書くこと無さに何となく。
多分続く。

トライアングルズ―三角関係図―（前書き）

まず最初に7巻で生じた矛盾について。
詳しく書くとネタバレになるので、矛盾と言っても許容範囲内だということだけ言っておきます。

トライアングルズ―三角関係図―

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者が」
実際、後一歩の所まで持ち込んだ一夏は代表候補生を相手によく頑張った方だ。ただ今回説教を受けているのは自業自得だ。自分の発言には責任が伴う、と言うことを身を持って実感しているだろう。
「武器の特製を考えずに使うからああなるのだ。身をもってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇さえあればＩＳを起動しろ。いいな」
「……はい」
「えっと、ＩＳは今待機状態になってますけど、織斑君が呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね。」
はい、これ。と渡された規則書に一夏はさらに顔を歪めた。
僕も一応目を通したが、『ＩＳを勝手に使ってはいけない』と言うこととその理由くらいしか書いてなかった。一体どうしてあんな分厚さになるのかはちゃんと読んでないから知らない。
「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」
そう言って立ち去る織斑先生の顔にはやれやれと言った表情が浮かんでいた。

「帰るぞ」
去っていく先生の背中を見ていると箒ちゃんが言った。
……一夏が負けてしまったせいで若干機嫌が悪そうに見える。信じていれば大丈夫と言った手前、居心地が悪い。
「あー、僕は寮に帰る前に寄っていくところがあるから」
だから、と言って箒ちゃんに耳打ちする。

――一夏はきっと悔しいと思ってる。だからこそチャンスだ、励ましてあげなよ。
「ッ！！」
僕の言葉を聞いた後、顔を真っ赤にした箒ちゃんは一夏を置いて行ってしまった。一夏はそれを追いかけていった。
チャンス、と言う意味の裏に隠した意味は伝わったようだ。
箒ちゃんが一夏に恋心を抱いているのは明らかだ。普通同じ部屋に住むとかあり得ないって。
ついでに言うと一夏も相当鈍そう。
「そう言うとこも主人公体質ってか？」
難儀そうな体質だ、僕はそう呟いて歩き出した。

シャワーの音が止んだ。
随分と長い間聞こえていた気がする。
実を言うとあまりにも長いのでちょっと不安を覚えたくらいだ。
後少し長かったら様子を見に行っていたかもしれない。
僕が帰りに買ってきたミネラルウォーターを取り出すのとセシリアが出てきたのはほぼ同時だった。
「おつかれ、セシリア」
そう言ってペットボトルを渡す。
「奢り。何がいいかわかんなかったから水だけど」
ありがとうございます。そう言うセシリアには元気が無かった。顔が赤く見えるが、シャワーなのだしのぼせたと言うことは無いだろう。
「勝ったのに元気ないね。どうしたんだ？」

「……勝ってない」
「へ？」
うつむいたセシリアは小さく呟いたので聞き取れなかった。
「だから……わたくしは全然勝ってませんの！」
今度はいきなり怒り出した。とりあえず具合悪い訳ではなさそうなので安心する。けど――
「でも、試合はセシリアの勝ちで……」
「あんな訳もわからない結末で勝ったなんていえませんの！！」

「落ち着いた？」
「は……はい。取り乱してしまってすいませんですの」
「や、そこまでかしこまらなくても……」
感情が押さえきれなくなったセシリアを時間をかけてなだめた。
その過程で大体の内容が把握できたのが幸いだった。
セシリアは今回の試合結果に納得していない。
結果的にはセシリアの勝利となっているにも関わらずそう言い切ったのだ。
それだけで僕の中のセシリアの評価が上がった。勘違いお嬢様からエリート（自称）までランクアップだ。
それからもう一つ……
「じゃあ、クラス代表は一夏に譲っていいの？」
「え、ええ。“一夏さん”が強くなるにはその方がいいですし……それから――」
セシリアは頬を赤く染めて建前を立てまくっている。
つまり、どっからどう見ても一夏への好意が見てとれる。
勿論、本人は否定するだろうが、完全に落ちる日もそう遠くないだろう。
おそらく一夏の苦労の種となるが……
――精々苦労しろ、そして爆発しろ。

いささか酷いかとも思ったが、友人だからこその言葉だと自分に言い聞かせる。

友人だから相談を受ければちゃんと乗ってやるし。

「――そうですわ！わたくしが一夏さんの専属コーチとして……」

……この日もセシリアの暴走はなかなか収まらなかった。今後は注意する必要がありあそうだ。

トライアングルズ―三角関係図―（後書き）

はーい。束姉の時間（名称未定）だよ～！
と言っても特に言うことはありません！
むしろ言えないことだらけだったりしちゃったりするしね！
あえて言うなら感想お待ちしております！
勿論どんな内容でもおっけー！誤字脱字等もあるんじゃ無いかと作者は震えておりますよ！
後、新学期が始まってしまったため、更新は不定期差を増すことが予想されておりまーす。ご注意くださいっ！

クラスメイトが注目する中、ついに明日香のＩＳが姿を見せる……
次回「ネームレス―名称未定の相棒―」
束姉様の自信作をみのがすなぁー！

試験的に次回予告までこなして貰いましたｂｙ作者

ネームレス―名称未定の相棒―（前書き）

特筆することがなければ前書きは書く必要も無いのだが……

それはそれで寂しく思うのです。

そんなことを書くくらい書くことは無いんですが。

ネームレス―名称未定の相棒―

クラス代表決定戦の翌日ＳＨＲでのことだ。
一つはクラス代表は一夏に決まった。
それから、箒ちゃんとセシリアで言い争いがあったらしい。
らしい、と言うのも寝不足のせいでまともに聞いていなかったからだ。
寝不足の理由はセシリアの暴走とか。
暴走自体は早い段階で止めることに成功したが、その後何故かミーティングをすることになった。
内容は、いかにしてクラス代表の権利を一夏に譲るのか。

ここまでならまだ良かった。問題はその後。
「一夏の前で慌てたりしたら格好つかないよな」
と言ってしまった自分を今からでも殴りに行きたい。
その言葉を切っ掛けに朝方まで練習をする流れとなった。
こんな所でセシリアの努力家の一面を見ることになったのは非常に残念な限りだ。
当のセシリアは寝不足など感じさせない様子。アドレナリンでも出ているのだろうか。
そんなわけで、秘技『授業を聞いているふり（居眠り）』でやり過ごした。
……二回ほど叩き起こされてしまった。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、篠ノ之明日香。試しに飛んでみせろ」
四月下旬になって、クラスメイトとはうち解けた（人間やれば出来るんだと実感した）けれど箒ちゃんは一向に心を開いてくれず、やはりイベントが必要か……と考えていたら指名が飛んできた。
今までの授業で実践が僕に回ってきたことは無かった。
「僕もですか？」
「ああ、いつまで待っても『最適化（フィッティング）』が終わらんようだし織斑は実践で物にしたんだ、これからはお前も実演に加わってもらう」
「わかりました」
……『最適化』が終わらない。割と深刻な問題だ。起動するぶんにはなんの問題も無いのだが……
先にＩＳを展開したセシリアと一夏に続く。

――起きて……

そう念じて目を開ければ既にＩＳは展開していた。
鈍色で無骨でゴツい装甲。折り畳まれていても大きいことが見て取れるウイングスラスター。
「なんか地味だね……」
そう言った意味合いの言葉がクラスメイトの間で交わされる。少し悔しい。
「ふむ、展開時間はセシリアよりも早いな。よし、飛べ」
先行したのはセシリアだ、チラリと見た顔は少し悔しそうだった。
わかりやすいなぁ、と思いながらセシリアの後を追う。一夏はさらに後ろ。
セシリアが少し前を飛び、僕と一夏が並んで飛ぶ。

ちなみにウイングスラスターは開いていない。と言うか何故か開かない。
「何をやっている。スペック上の出力では白式がトップのはずだぞ」
そんなおしかりを受けた一夏は難しい顔をしている。
「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するのが建設的でしてよ」
「そう言われてもなぁ、大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ、これ」
「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話しになりますもの」
「わかった。説明してくれなくてもいい」
即答する一夏に思わず笑ってしまった。
「一夏は空飛んでて気持ちいい？」
「そりゃあ、まあ」
「もっと高く、もっと遠く、もっと速く、そんな風に思わない？」
「……思うな。もっと速く飛びたい」
一夏は少し考えてから力強い口調でいった。
すると白式は一夏の望みにその速度をあげて答えた。
「でも、理屈を知っていればその理屈を元にイメージを固められるから、聞いて損は無いと思うよ？あ、僕に聞いてもうまく説明できないからセシリアに聞いてね」
「後は実践するのが一番ですわ。よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。そのときは二人きりで――」
『一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！』
通信回線から響く声。遠く地上を見れば箒ちゃんがインカムを奪って怒っている。
何というタイミング。こっちは二百メートル上空にいるのに見えているのだろうか？
もしくは恋する乙女の超直感か第六感か。

箒ちゃんとセシリアは目下牽制中。見ているこっちまでハラハラしてくる。
「次は急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」
「了解です。ではお先に」
ぐっと加速して降下していくセシリア。
「うまいもんだなぁ」
「上手な人を見るのも上達への道だよ。じゃあ次いくね」

そう言い残して急降下に入る。先輩面したから失敗は出来ない。
急降下は技術じゃなくて度胸。最初に勢いをつけてから後の半分は自由落下に近い。
落下の中、体勢を変え着地に備える。軽くライダーキックな感じだ。
近づく地面を見据え、タイミングを計る。

――ここだっ！

制動をかけたのは地面から2、3メートルの所だ。
いけると思ったのだが、体は勢いに流されてつま先は地面にコツンとついてしまった。
「あらら、行き過ぎか……」
「どうやったらあんなぎりぎりまでブレーキをかけないで降りてこられますの！？」
降りたそばからセシリアが問いつめてきた。
「どうってスペックから計算して大丈夫な所まで……」
「そーいう話ではなくっ！あんなことして怪我――」

――――ズドォォンッ！！！

地面に激突し大きな音を立て、ついでにグラウンドに大穴を空けたのは勿論一夏だ。
どうやら世界で唯一のＩＳ操縦者の男子は見ただけで真似できるような天才というわけでは無かったようだ。

飛行の次は武装の展開だった。
一夏もセシリアもそこそこ手間取っていたがこの程度は簡単なことだ。
手品のように武器を展開させていく。
これらの武器もＩＳと同じで飾り気もない鈍色で無骨な物ばかり。
やや短め、１．４メートルの近接ブレードが二本。小型のマシンガンが二丁、ビームハンドガンが二丁。
それぞれ二つずつあるのは趣味だ。
「なんでそんな簡単にできますの？」
「なんでって言われても出来るんだもん」
心当たりが無くはないけど……
「強いて言うなら出来ることを疑わないから出来るんだよ。疑ってないってことはイメージできるってことなのかなぁ？」
僕だって伊達にオタクじゃなかった。例に漏れず邪気眼な黒歴史があります……
そんな年頃を過ぎてからも空を飛びたいとかはよく考えていた。
単なる現実逃避に過ぎなかったけど。

「時間だな、今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」
授業の後手伝うと一夏に言ったら女子にさせるわけにはいかないと言われた。

カチンと来たので今後、そう言うことがあっても手伝わないと心に誓った。

最初に男友達と思ってくれと頼んだのをもう忘れたのだろうか？

鈍感な上に記憶力に乏しいのはもはや哀れに思えた。

ネームレス―名称未定の相棒―（後書き）

おっとー！そう言えば言っておきたかったことがあったよ、束姉でーす。
明日香ちゃんの元の世界ではオタクだったことについてだよっ。
これには『男なのに下手な女子より可愛い』という容姿が災いして敬遠されていたという理由があります。
今の明日香ちゃんは見た目通り女の子だしＩＳ学園のルックス平均はかなり高いのでその辺の隔絶は生じないことになります。
よって、今の明日香ちゃんの姿こそ本来の姿と言えるのですっ。
ああ、ここはオフレコねー明日香ちゃん怒っちゃうから。

ＩＳについては説明することはありませーん。
大体が文中で言ったとおりだし、まだ本来の姿でもないしね。
名称もこの前インスピレーションが降りてきましたので大丈夫っ。

箒ちゃんと金髪の子の戦いは硬直状態にあった……（理由はいっくんの鈍さだけど）
そんな中、転校生の噂が流れてきた！（隣のクラスだけど）
そして現る転校生っ！（怒られたけど）
次回「セカンド・フレンド―第二幼馴染み―」
こうご期待！？

セシリアのことを名前で呼んでくれない束さん。
次回予告から降板ですかね？

セカンド・フレンド―第二幼馴染み―（前書き）

クラス代表就任パーティー完全に忘れてました。
でもまあ、原作通り書いてる訳じゃ無いしそのまま書いたらわざわざ読む必要ないです。
読みたければ原作読めばいいんだし。
と言う原作読者向けな内容になってます。
原作と同じ部分に意味がないのでカットしたりもしてます。あしからず。

セカンド・フレンド―第二幼馴染み―

「はぁぁ～」
ドサリとベットに倒れ込む。気怠さと眠気が同時に襲ってくる。
『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と言うこともあり食べ過ぎたからだ。
この体になって食べる量が多少減った気がする。故にテェンションの上がった食事では食べ過ぎてしまう事が何度かあった。
そう言った微妙な違和感が無くなって行くのは良いことなのかは判断に迷った。

もう、いいや。今日はこのまま寝てしまおう。
そんな考えも夢の中にゆっくりと解けていった。

「転校生？」
朝、友人からもたらされた噂はそんな内容だった。
こんな時期に？と思わないでも無いがここはＩＳ学園。普通とは当然違う。
「そう、中国の代表候補生なんだって～」
「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」
「このクラスに転入してくる訳ではないのだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」
「でも、どんなやつなんだろうな」

セシリア、箒ちゃん、一夏とそれぞれの感想はそんな感じ。
「今のお前に転入してくる女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があると言うのに」
箒ちゃんは不機嫌さ割り増しで一夏に突っかかる。ＩＳ学園に転入してくるとなれば当然女子のはずだ。唯一の例外は目の前にいるから断言できないけど。
箒ちゃんの言いたいことも考えてる事も手に取るようにわかる。態度を見れば一目瞭然だ。
「そう！そうですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けてより実践的な訓練をいたしましょう。お相手ならこのセシリア・オルコットにお任せですわ」
セシリアも負けじとアピールする。効果のほどは見受けられないが、箒ちゃんもセシリアも一歩も譲らない戦いはこの一ヶ月弱の間に恒例のような扱いだ。
この手の噂に女子は弱いというのか強いうのか、僕は精神的に男子を止め切れて無いのでわからない。
「まあ、やれるだけやってやるさ」
「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」
「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」
「織斑君が勝つとみんなが幸せだよ～」
ついでに、この時期の対抗戦はイベントの意味が強いらしい。賞品なんかもあって、たしか優勝クラスには学食デザートの半年間無料パスだとか。
あの学食のレベルはかなり高いので女子からしてみればとても魅力的な賞品らしい。
「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ～。おりむ～頑張って～」
……やっぱり一組だけ専用機三機っておかしいよ。何らかの意志を感じてしまう。

「――その情報古いよ」
そう言い放ったのは教室の入り口に立つ少女だった。少女というのもぱっと見自分より身長が低いからだ。自分より身長が高い相手には少女なんて敬称は出来ない。
強い意志のこもったつり目にツインテール。また元気そうな子の出現に平穏か遠のいた気がする。
「鈴……？お前、鈴か？」
一夏、またお前絡みなのか……
「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」
「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」
「んなっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！」
なんか一夏と親しそうだね。後、出来れば後ろで殺気を放ってる二人に気づいて欲しい。
僕の手には負えないから何とかして。
「おい」
「なによ！？」
バシンッ！と振るわれる出席簿（スマッシュ）。（一夏曰く）関羽の登場だ。
「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」
「ち、千冬さん……」
「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すいません」
うわぁせっかくの登場が台無しになってる。少し哀れ。
「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」
「さっさと戻れ」
「は、はいっ！」
脱兎の如き猛ダッシュ。怯えるその姿はまさに兎のようだ。多分素直な子なんだろう。
「アイツ……ＩＳ操縦者だったのか。初めて知った」

「……一夏今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだった――」
「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で――」
一夏に詰め寄る女子の群れ。あぁ馬鹿。今はそんな事したら……
バシンッバシンッバシンッ！！
「席に着け、馬鹿ども」

一夏の周りにいるとイベントには事欠かないようだ。
その余りの主人公っぷりに少しだけ呆れた。
それから自分も主人公パーティーに含まれていることに気づき、ため息をついた。

それでも少し楽しく思っている自分はどうかしていると思う。

セカンド・フレンド―第二幼馴染み―（後書き）

今回の束姉コーナーはお休みっ。
特に何もないし、今はちょっと手が離せないんだ。
ごめんね～？引き続き、感想他お待ちしておりますんっ。

篠ノ之箒だ。
全く、あの女子はいったい何なのだ……
それに一夏のあの反応……むぅ（怒）
次回「ブイエス・フレンドリー―幼馴染み対幼馴染み―」
私は負けるつもりは無いっ！

ブイエス・フレンドリー―幼馴染み対幼馴染み―（前書き）

学校始まったから結構厳しいです。
何が、とは言いませんが。

ブイエス・フレンドリー―幼馴染み対幼馴染み―

「お前のせいだ！」
「あなたのせいですわ！」
この日の昼休みは箒ちゃんとセシリアのそんな言葉で始まった。
おそらく授業中上の空だったことと関係があるのだろう。それがなぜ一夏のせいなのかはわからない。
「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」
一夏も心当たりは無いようだが、一夏は一夏で当てにならない。
「む……。ま、まあお前がそう言うなら、いいだろう」
「そ、そうですわね。行って差し上げないこともなくってよ」
……ついていく必要は無い。けど、セシリアを放っておくのはマズいかもしれない。何が原因で暴走するかわかったものでは無いからだ。
「僕も良いかな？一夏」
「ああ、いいぜ」

一夏を先頭に学食を目指す。クラスメイトの一部も引き連れての移動はもはや慣れたものだ。
今日のお昼は親子丼。ここの学食は何を食べてもおいしい。
一夏は高確率で日替わり定食だが、好き嫌いの少なくない僕は無難な物を好む。
「待ってたわよ、一夏！」
「まあ、とりあえずそこどいてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」
堂々と再登場した鳳鈴音は一夏に注意され道をあける。手に持ったお盆にはラーメン。ますます締まらない。
「のびるぞ」
「わ、わかってるわよ！大体、アンタを待ってたんでしょうが！何で早く来ないのよ！」
理不尽だなぁと心の中で呟きながら、食券をおばちゃんに手渡す。
その後も一夏と鈴音は和気藹々と言った会話をしていた。その間僕が口を出さなかったのは鈴音に人見知りしたとかでは無く。
会話の内容から一夏と鈴音は約一年ぶりの再会らしく、会話が弾んでいる。
少なくとも仲のいい知り合いであることはわかった。

料理を受け取った後テーブルに移動する。大人数だったが幸い空いているスペースがあって助かった。
「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」
「そうですわ！一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの！？」
僕と同じ理由で黙っていたのかはわからないが、流石に限界だったらしく矢継ぎ早に質問をぶつける二人。
二人というのは勿論箒ちゃんとセシリアだったが、その質問はクラスメイトの総意と言って良かった。
「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」
……慌てて否定する鈴音。
「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染みだよ」
「……」
「……何睨んでるんだ？」
「なんでもないわよっ！」
……そして怒る鈴音。

間違いない、典型的なパターン過ぎてもうなんてコメントしていいやら……

つまり一夏の鈍感さの被害者。三人目とかマジ無いわー。

三人もいれば立派なハーレムじゃんもう。

その後の会話はあまり覚えていない。座った位置は中心メンバーな位置だったがもはやどうでも良かった。

会話に加わらずモブキャラ然として親子丼を食べていたが、いつも通りおいしくは感じなかった。

きっと思考が他の事に捕らわれていたからだ。食事に集中するべきだったのだ。

幼馴染みがどうとか、一夏の食事がどうとか、放課後は訓練がどうとか……

そんな言い争いなんかは聞き流して、今後はどういう方針で一夏達と関わっていけばいいのかだけが頭の中でループしていた。

主人公の近くにいるのべきかいないべきか……

ブイエス・フレンドリー―幼馴染み対幼馴染み―（後書き）

束様だよ。みんな元気かな？
だんだん一話の量が減っていってるね？
作者は新学期が忙しい事を言い訳にするのは良くないとわかっているのかな？
今後は気を付けるようにお仕置きしておくよっ！

セシリア・オルコットですわ。
ほんと、ややこしいことになりましたわ……
しかし、わたくしには一夏さん専属コーチというアドバンテージが……
え？次回はそんな内容じゃない？どういう事ですの！
次回「ウォーリング・イン―迷う最中で―」
はぁ、踏んだり蹴ったりですわ……

ウォーリング・イン―迷う最中で―（前書き）

なかなか進まない……
そしてまさかの人物の登場。
自分でも予想外です。

ウォーリング・イン―迷う最中で―

どさっ

荷物が手から滑り落ちたが、気にも止めなかった。
別に壊れるような物は入っていないから問題も無いだろう。
思考はぐるぐるとループし続けて午後の授業については何も覚えて無かった。
無意識のうちに寮の部屋に戻って来ていた。

このまま眠ってしまおう。逃避気味にそう考え、ベットにダイブしかけたとき携帯が鳴った。どうやらメールのようだ。
無視してしまうことも出来たが気になるし、一応確認して充電器に刺すくらいはしようと携帯を開いた。
メールの送り主はチェルシーさんだった。

チェルシーさんはセシリアの専属のメイドさんだと言う。住む世界の違いを見せつけられた気分だ。
『――例の事について、詳細はＰＣの方に送っておきましたのでご確認ください。』
ただの高校生である自分にはやや堅すぎる文章だったが、内容を要約するとそんな内容だった。
その日本文の丁寧さはその人柄を表している気がする。実際に会ったことは無いが何度かの電話とメールのやりとりをしている。

そう言った仲になった理由はセシリアが紅茶を淹れようとしていた事にある。
紅茶を寮の部屋で飲もうと思うと、市販のペットボトルかパックの物となる。
セシリアはきちんとした物が飲みたくなったらしいのだが淹れ方がわからないというのでティーバックの物をだした。
しかしそれでも満足しなかったセシリアは実家からティーセットを取り寄せた。
そのティーセットを使って四苦八苦しながら紅茶を淹れては見たが、それでも納得しない。
「チェルシーの淹れた紅茶の方がおいしい。チェルシーの淹れた紅茶が飲みたい」
それがセシリアの素直な気持ちだった。
偽り無き心に悪意は無かったし、何より途中で諦めるのも嫌だった。
結果、そのチェルシーさんから紅茶の淹れ方についてレクチャーを受けることになったのだ。

チェルシーさんのメールは紅茶の淹れ方に関するものだ。
紅茶は奥深く、そう簡単にチェルシーさんの味には至れない。まだまだ修行中の身だ。
気の利いた返事が思い浮かばず『ありがとうございます』と返事をした。
そのまま充電器に刺して寝てしまおうと思うのもつかの間、再び携帯が鳴った。
今度は電話。着信名はチェルシーさん。流石に無視は出来ない。

『こんにちは、明日香様。お時間大丈夫ですか？』
とても18歳とは思えない落ち着きを持った声。
チェルシーさんの方が年上だから様付けは止めて欲しいんだけど

ねぇ。
「はい、大丈夫です。チェルシーさんの方こそお仕事中では無いんですか？」
『問題ありません。それよりなにかあったんですか？』
「え？なにかって……」
『今のお返事。全然明日香様らしく無いじゃないですか。なにかあったとしか思えません』
本当に鋭い。あったと言えば確かにあったが、メール越しにそれがわかるものだろうか？
「よくわかりますね」
『ふふっ。私はお嬢様の専属メイドですから』
「ああ……」
何となくわかる。セシリアは責任感の強いところがある。常に気丈に振る舞おうとしている節もあるから誰かが気づいてあげないと危ないタイプだろう。
『それで、なにがあったんですか？話せる事なら聞きますよ』
「ええっと……悩んでるんです。僕は……」
――この世界の人間じゃないから……
「……僕がここにいてもいいのか」
――今は女でも本当は男だから……
「……みんなの側に居てもいいのか」
――こんな場所は自分には場違い……
「……資格が無いんじゃないかって」

……
「……なにも言ってくれないんですね」
『最初に言ったじゃないですか、お聞きしますよって』
「聞くだけですか」
『聞くだけです。私にはどうすることも出来ませんから』
……それで良いの？
『詳しい悩みはお聞きしませんから。できても助言程度です』
「助言ですか？」
『ええ、それも具体的なものじゃありません。悩みの答えはいつも自分の中にありますから、ゆっくり落ち着いて、と言うことくらいです』
「それだけですか……」
『自分を見失わないことは大切なことですよ』

それでは仕事がありますので、そう言って通話は切れた。
チェルシーさんの声を聞いただけで少し落ち着いている自分に気づいて少し驚いた。
チェルシーさんは特に何もしていない、気づいてくれただけだ。
それがこんなにも心を落ち着けてくれた。少なくとも僕が居てもいい場所があると思えた。
異世界と言っても技術水準が多少違うだけで同じ人間の世界だ。

先ほどとは気分の向きが変わったことを意識しながらベットに横になる。
答えは自分の中にある。
その言葉につられて一つの台詞を思い出した。
『でかい悩みは抱えて進め』
元の世界の漫画の名言だ。数多くの本（漫画やラノベ）に触れて

きたからこういう言葉もいくつも自分の中に残ってる。

……でかい悩みだ。なにせ世界級の大きさだから。
こんなでかい悩みの答えなんてそう簡単には出てこないだろう。
吹っ切ることも忘れることも出来ない。
だからといって悩み、苦しみ、塞ぎ込んでても答えを見つけられる訳がない。

今まで螺旋状に下降していた気分はいつしか変わっていた。
チェルシーさんにお礼を言わなきゃ。
そう考えたのが眠りに落ちる前だったのか、眠りに落ちてからだったのかはわからない。

夕飯の時間に起こしてくれたセシリアが随分と幸せそうな顔をしていたと言っていた。
あまり寝顔を見られるのは恥ずかしいと笑って誤魔化した。

ウォーリング・イン―迷う最中で―（後書き）

じゃじゃ～ん、束さんだよ～！
『でかい悩みは抱えて進め』
ネギま！の長谷川千雨の名言だね。
私にはなんのことかわかんないけどそう言うことだよっ！

どうも、チェルシーです。
明日香様がいつもの調子に戻ってくれて嬉しいです。
出過ぎた真似をした甲斐があったと言うものです。
次回「アンダー・ツー―夢日記その二―」
私の口調は仕事柄当然の事ですので、明日香様にも早々に慣れて頂きたい物です。

アンダー・ツー―夢日記その二―（前書き）

面倒だから描写はしませんが、主人公グループ以外にも交友関係はありあます。

運命力的な何かが働いていることがあって原作イベントに関わってると思ってください。

あんまり関わってない？

これからです。

アンダー・ツー―夢日記その二―

悩みは誰にでもある。
チェルシーさんに励まされた次の日のことだ。
朝から箒ちゃん、セシリアの両名は不機嫌で、一夏も心なしかげんなりしていた。
一夏によると「鈴が急にキレた」とのこと。
僕にはなんとも言えない。自分だって悩んでるし、何より女の子の事なんて専門外だ。
発表されたクラス対抗戦の初戦が二組……つまり鈴音だった事も含めて応援だけしておいた。

それから、一夏達は訓練に勤しんでいるが僕は不参加。
一時移行（ファーストシフト）が終わってないから何となく行きづらいのだ。
代わりに一度部屋に戻って紅茶を入れる。しっかりと冷やしてアイスティーとし、練習しているアリーナへ持っていく。
箒ちゃんが飲んでくれないから少しへこんだ。

まあ、そんなこんなな日々が数週間。
五月に入り、クラス代表選も間近となった日のことだ。
その日はとても……とても懐かしい夢を見た。

『わかった。お前の名前の理由を教えてやろう』

その声は父のものだった。

父は優しさに溢れるような人物だと思う。
しかし、頼りがいもあった。
僕はそんな父に似ていないことを悔やんだりもしていた記憶がある。
女の子と間違われる僕は当然母に似ていた。
それを聞いた母は「見た目は私に似ていても中身はお父さんに似ているわ」と言っていた。
僕に頼りがいなんて有りはしないと思うのだけど。

『お前はな、生まれる前は女の子だって言われてたんだ』

記憶の中、幼い僕に父は語りかける。
覚えのある会話。確か、小学生の低学年の宿題だったっけ？

『最初は『アスカ』ってつけるつもりだったんだ』

最初も何も飛鳥って名前じゃん。

『漢字は……言ってもわからないだろうけど『明日の華』って書くんだ。お、書ける？じゃあ書いて見ろ。』

僕（少年）はどこからか紙と鉛筆を持ってきて漢字を書く。『明日花』

『おしいな～『花』は難しい方の漢字で『華』って書くんだ』

おいおい、小学生の低学年には難しいだろ。

『これは『明日』『華』が咲くって意味だ。言ってみれば蕾だな』

なんで素直に蕾じゃ無いんだよ。

『なんでってそりゃ、そっちの方が格好いいからだよ』

おいっ！

『冗談だって、ちゃんとした意味がある』

『蕾って言うのは種とならんで可能性の象徴だ。いつか華を咲かせる。けどいつ咲くのかはわからない、咲かないまま枯れるかもしれない。けど『明日華』は違う。『明日』咲く『華』だ。『明日』も咲いている『華』だ』

小学生には難しいだろ……

『わかんない？まあ、そうだろうな。その内わかるようになるさ。』

確かに今の自分にはわかるけど……

ありがとう、と言って紙に向き直る僕（少年）。

しかし、鉛筆はピタリと止まったままだ。

『僕の名前は『明日華』じゃなくて『飛鳥』だよ？知ってるよ』

僕（少年）が知りたかったのは『飛鳥』の由来なんだって。

『あー、それは母さんが『男っぽい名前の方がいい』って言ったから『明日華』から『飛鳥』に変わったんだ』

て、適当ーっ！

しかも男っぽいかどうかも疑わしいって！

『まあ、今思えば『明日華』でも良かったんじゃないかって思うんだよなぁ……』

それも酷いーっ！

気づけば夢は終わっていた。
多少げんなりした気分で朝を迎えた。
父への憧れは若干輝きを失った気分だ。
今まで忘れていたのはある意味トラウマだったからか。

しかし、勿体ないことをした。
こっちの世界で名前を『飛鳥』から『明日香』に変えたのは束姉だ。
別に良いと思う反面、良くないとも思った。
男としての微かなプライドとかだと思っていたが、違った。
父がくれたもう一つの名前を心は覚えていたんだ。
僕の名前は『明日香』じゃなくて『明日華』であるべきだと、心はそう言っていた。
それに気づくことが出来ず、なし崩し的に『明日香』と言う名前で戸籍を持つことになったのだ。

終わったことを悔やんでも仕方ないが、今更こんな昔のことが夢にでてくるのは少し不思議だった。
ふと、首のチョーカーに手を当て、問いかける。
今日の夢は何か意味があるのか？

勿論ＩＳは答えてくれない。
とりあえず日記に書き留めて置くことにして机に向かう。
……今度暇があったら夢占いとかしてみようかな？

アンダー・ツー―夢日記その二―（後書き）

鳳鈴音よ。ついに来たわクラス対抗戦！
一夏をボッコボコにしてやるんだからっ！
逃げるんじゃないわよッ一夏！
次回「グッド・モーニング―目覚めの時―」
中国の代表候補生の実力、思い知らせてやるんだから！

グッド・モーニング―目覚めの時―（前書き）

誰か何か言って……
感想が無くて心細い次第です。
要求するような物では無いですけど。

グッド・モーニング―目覚めの時―

アリーナの観客席は学院の生徒で溢れていた。
比喩なんかじゃなく立ち見もいれば、それでも入りきらずモニター観戦までしているらしい。
これだけの女子が集まって静かでいられる筈もなく、大いに賑わっていた。
話題の大部分はこれから始まるクラス対抗戦、一組対二組――

つまり一夏対鈴音の事についてだ。
とことん一夏は注目されている。

場所は観客席、近くにはクラスメイト。
しかし、箒ちゃんやセシリアはいない。
二人はピット内という特等席で今頃一夏にあれこれ言ってる頃だろう。

「あっちゃんは～ピットには行かなかったんだね～」
隣に座る友達、布仏本音は不思議そうに訪ねてきた。
実際、一夏は呼んでくれたが遠慮して置いた。
「特別扱いされるのはちょっとね」
とりあえずはそう言うことにしておく。
箒ちゃんとセシリアのチャンスに水を差さないためという建前と、そんな危険地帯はゴメンと言った気持ちが半分。
「でも、おりむーは呼んでくれたんでしょ？それって友達に近くにいて欲しいって事なんじゃないかな？」
「むっ？」

確かに、一夏には友達として扱って欲しいと言いつつ壁を作ってるのは僕だったのだろうか？
「そっか……。そうかもしれないね」
「きっとそうだよ～」
……今度からはもっと積極的で居よう、友達なんだから。

「そろそろ始まるね」
その言葉通り、アリーナ中央では一夏と鈴音が対峙していた。
鈴音のＩＳは名前を『甲龍（シェンロン）』。大きな刃を両端に持ったバトンのような武器を装備している。おそらく近接型だが、特徴的な形をした非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が気になる。

「どっちが勝つかデザート賭けよ～？」
そんな本音の提案を聞いて実は腹黒い子なんじゃ無いかと思った。
「冷静な判断からすれば、機体は同じく第三世代型でもＩＳ起動時間に勝る鈴音の方が有利と言わざる負えない。けど――」
「けど？」
「――けど、『一夏の友達』であることを自覚した僕に一夏以外の選択肢はあり得ないよ」
「ふふふ～。なんの事をいってるのかな～？」
「いいよ、その賭け乗った。勿論勝者は織斑一夏」
じゃあ私は鳳さんの勝ちだね～と、のほほんとした様子を崩さない本音。
これは一種のポーカーフェイスかと疑問になったとき。
試合開始のブザーは高らかに鳴り響いた。

同じく近接型なら一夏にも勝機は十分にあると見た予測はアッサ

リと外れた。
鈴音のＩＳは近～中距離型だ。
あの非固定浮遊部位が光るとともに見えない砲弾が一夏を襲う。
恐らくはあれが甲龍の第三世代兵器。
威力こそ高くないが全方向に撃てるらしくそこそこに連射も利く。
砲身も見えない為、一夏も迂闊に攻められないでいる。

「おりむー防戦一方だね～？」
相変わらずのほほん顔な本音。
僕も一夏に習ってのほほんって呼ぼうかな？
「まあねぇ、不利なのは仕方ないよ。白式に射撃装備が無いんだし」
白式には射撃装備がない。織斑先生から聞いた話だと白式は欠陥機だとまで言い放った。その後ＩＳはそもそも完成していないから欠陥も何もないと否定はしたがフォローにはなっていなかった。
結局射撃装備を後付することすら出来ず近接オンリーの機体のままだ。
「けど、白式にはどんな状況でもひっくり返す武器がある」
「どーいうこと？」
「あの近接ブレード。『雪片弐型』の特殊能力『零落白夜』のこと」
「『零落白夜』？」
「そう、その能力は『バリヤー無効化攻撃』。簡単に言うと相手の絶対防御を強制発動させる事が出来る」
「それってすごいの？」
「簡単に言うと『いちげきひっさつ』見たいな技？」
「なるほど～」
ポ〇モンが通じた！？
「あっちゃん詳しーね」
「いや、織斑先生に聞いたんだ。この前のセシリア戦で、何で一

夏のシールドエネルギーが無くなったのか聞きに行ったらね。『零落白夜』は自分のシールドエネルギーを攻撃に使う諸刃の刃だって」
「ふむふむ、べんきょーになるね～」
驚愕と言って過言ではない白式の秘密に動じる様子のないのほちゃん（？）。
「……つまり、一夏にもチャンスがある。あとはチャンスをつかめるかどうか」
「ギャンブラーだね～」
そう言ってくれるなと突っ込もうとした時、一夏が動いた。
まさに奇襲。急加速で一気に鈴音に迫る一夏。
勝負が決まるかと思われたその時、衝撃がアリーナを襲った。

轟音と衝撃とともにシールドを破ってアリーナ中央に落ちたそれは激しい砂埃を巻き上げた。
観客席は一瞬の沈黙の後、パニックに襲われた。
逃げようとする生徒達の流れに逆らった僕はクラスメイトとはぐれてしまった。
しかし、観客席最前列にたどり着くことは出来た。
友達に限りなく近い場所にだ。
もう逃げない、そう決めたばかりだったから。

砂埃の中から現れたのは全身装甲（フルスキン）のＩＳだった。
基本的にシールド＝防御力となるＩＳで全身装甲は見たことがなかった。
その上大きな腕と持つ巨体は何かの冗談のようだ。
勿論、冗談であったらどれだけ良いことか、そのＩＳは一夏達を狙っているのだ。
今だって高火力と思われるビームから一夏達は逃げ回っていた。

――目覚めてっ。
許可を取らずにＩＳを起動させるのは規則に反するがそんな事は忘れて、ＩＳを呼んでいた。
一瞬で鈍色のＩＳは展開され、ありったけの力を込めた拳が空間を叩いた。
アリーナに張られたシールドが一夏達を助けに行くことを拒んでいた。
絶対的とさえ言える壁。
僕のＩＳにこのシールドを破れる兵器は無い。
「僕には何も出来ないのか？ここで見てるしか出来無いのか！？」
感情が爆発していた。こんなに感情を燃やしたのはいつ以来だろうか？
それだけ友達を、一夏を助けたいと思っている。

――落ち着いてください、マスター

凛とした声が響いた。
「誰だっ！？」
周りに人影は無い。

――戦場では冷静さを失った人から死んでいくそうですよ？

「え？ああ」
確かにそれは聞いたことがある。
そして、冷静さを取り戻して気づいた。
体が、いやＩＳが光ってる。

――『最適化（フィッティング）』完了。一次移行（ファースト・シフト）を開始します。

「は、一次移行？」
光は輝きを増し、無骨だった装甲が生まれ変わる。
鈍色だった装甲が桜色に染まる。

「これが、僕のＩＳ……」
『ハイ、マスター。私がマスター専用のＩＳです』
「……ＩＳって喋るんだっけ？」
『私は特別製だからです。それでマスター、お願いがあります』
「え、はい。なんでしょう？」
『名前を……貰えますか？』
「……ッ！」
名前。
それは束姉との約束だ。

――綺麗な桜色。

――『明日華』。

「わかった。君の名前は『桜華』だ」
『ハイ、マスター。私の名前は『桜華』です』
「それから、おはよう。『桜華』」
『ハイ、おはようございます。マスター』

「僕に力を貸して。友達を守る力を。」

『ハイ、マスター』

グッド・モーニング―目覚めの時―（後書き）

ハーイ束姉登場！
しかし！ここで語ると次回のネタバレになるので今回は何も言わずに帰るよ！
また次回会おうっ！でわでわ。

篠ノ之箒だ。
一夏……。私は信じているぞ。
次回「サクラ・ビット―華片―」
男を見せろよ、一夏！

サクラ・ビット―華片―（前書き）

突貫で疲れました。
前書き＆後書きは後で書き直します。
遅く、どころかご無沙汰級になった更新です。

サクラ・ビット―華片―

鮮やかな桜色をした装甲は滑らかで、まるで美術品のようだ。
特徴的なのは五機の非固定浮遊装甲（アンロックユニット）。大きな二機はウイングスラスターで、小振りの三機はリアアーマー。
それぞれ桜の花びらの形をしている。

これが僕の専用機。

『マスター。早速ですが手をシールドバリアーに当ててください』
「こう？」
突き出した右手が不可視の壁に触れる。
ＩＳのハイパーセンサー越しに新しい情報が表示される。
青い六角形の連なった壁は、どうやらシールドバリアーを擬似的に表現したもののようだ。
『シールドバリアーを中和します』
「そんなことができるの？」
『甘く見ないでください。そのぐらいやってみせます』
そう言った瞬間から青い六角形が手の部分から徐々に赤く変わっていき、直径二メートル位で止まった。
『……中和は完了しましたが、思った以上にバリアーが強固です。近接ブレードで強引に突破してください。』
「分かった」
左手にブレードを展開する。
ブレードも以前のものから変化して、滑らかな刀身を持つ幅広なブレードとなっていた。
「今いくよ、一夏」
思いを乗せた一振りがバリアーを切り裂き、その隙間からアリーナ内部へと躍り出る。

「一夏ッ！！」
「な、明日香！？どうしてっ！？」
「どうしても何も、助けに来んだよ！」
バリアー突破に手間取ったために、一夏と鈴音はもうボロボロだ。
『マスター、無駄口叩いてる暇はありませんよ。攻撃、来ます』
桜華の厳しい忠告通り攻撃が来た。
僕たちはバラバラに回避して攻撃の的を絞らせない。

『敵性ＩＳ情報、解析完了。私の武器では有効打を与えるのは難しいようです』
「なんだって？」
『ぶっちゃけ火力不足です。マスター』
それはぶっちゃけ過ぎ。
「一夏聞いてた？助けに来たのに足止めが精一杯みたい。止めは任せていい？」
『……ああ、任せろ！』
プライベートチャンネル越しの一夏の声は頼もしい。
だから何の躊躇いもいらなかった。
『零落白夜も後一回しか使えない。チャンスは一度だ！』
了解と答えるより速く、高出力のビームを放つ敵に迫る。
左手にはブレード。右手にもブレード。
効率的とは言えないかもしれないが、これが僕の唯一のポリシー。
すなわち、防御より速度を。

踊るようなステップでビームを掻い潜る僕をビーム射撃が援護した。
一夏は勿論、鈴音でもない。
『隙を作ります』
射撃は桜華が操るビットによるものだ。
桜の花びらの形をした小さな五機は威力こそ高くないが、敵の周

りを縦横無尽に飛び回り注意を引きつけていた。
敵の反応は信じられない速度で、真後ろからの攻撃ですら躱してみせた。
しかし、躱した一瞬は十分な隙となった。
低い姿勢で距離を詰め、密着した状態でブレードを振るう。
相手の主力武装は両腕の高出力ビームの様だが、こうして密着していれば撃つことも出来ない。。
闇雲に振り回される両腕も、射撃の援護もあって悠々と躱す。
後は一夏のために大きな隙を作るだけだ。

『一夏ぁっ！』
その大声はアリーナのスピーカーから響いた。
間違いなく箒ちゃんの声だ。
『男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！』
ハウリングするその声は、今まさに天使の声に聞こえた。
なぜなら、敵ＩＳがその声に反応して決定的な隙を作ったからだ。
「一夏っ、今だっ！！」
叫びつつ、両手に持ったブレードを量子化。
代わりにマシンガンを展開して、がら空きの背中にゼロ距離で無数の弾丸を叩き込む。
「「うぉぉぉぉおおおっ！！」」
一夏と僕の雄叫びが重なる。
試合で使った時よりもずっと速い瞬時加速（イグニッション・ブースト）で、一夏は空を駆ける。
そして零落白夜が閃き、敵ＩＳの右腕を切り落とす。
同時にマシンガンの弾倉は撃ち尽くされた。
止めには至らなかった。故に、一夏に反撃の左腕が伸びる。
『『一夏っ！』』
箒ちゃんと鈴音が叫ぶが、慌てる必要はない。

「……狙いは？」「お願い」
『完璧ですわ！』『ハイ、マスター』
計九機の狙撃が敵ＩＳを撃ち抜く。
観客席のセシリアのブルー・ティアーズと桜華のビットだ。
集中砲火を浴びた敵ＩＳは煙を上げて墜落した。

「なんとか倒せたね」
『ギリギリのタイミングでしたわ』
本当になんとかだった。余裕なんてあったもんじゃない。
「ああ、そうだな――」
『ッ！敵ＩＳが再起動！攻撃、来ます！』
桜華の声に全員が墜落した敵ＩＳに向き直る。
そして見たのは敵ＩＳの捨て身の砲撃だった。
明らかに限界を超えて動く敵ＩＳに反応できたのは一夏だけだった。

一夏は僕たちを守るために、こちらを狙ったビームの光に飛び込んだ。

サクラ・ビット―華片―（後書き）

ほんとすいません。今更書きます（４／２６）

織斑千冬だ。

あの馬鹿は無茶しおって……

ホント姉不孝者だよ、アイツは。

次回「アフター・ナイト―戦いの後に―」

篠ノ之のＩＳも……。仕事も山積みだな。

アフター・ナイト―戦いの後で―（前書き）

完全にご無沙汰となりました。
これからはもっと頻繁に更新を……。
無理でも週一でくらいは上げたいです。

アフター・ナイト―戦いの後で―

一夏は僕たちを守るためにビームの光に飛び込んだ。

敵ＩＳも一夏の最後の斬撃と、八つ当たりのような射撃の嵐（僕とセシリアのビット、鈴音の衝撃砲）にその体を四散させた。

幸い、一夏に大怪我は無かった。零落白夜によってビームが無力化されたからのようだ。

しかし、彼は気を失ってままで保健室に寝かされている。

心配はしている。当然だ。一夏は友達なのだから。

けど僕は今、自室にいる。

本当なら眠った一夏のすぐ側にいたい。でも、そうしなかった。

見てしまったからだ。

保健室付近でソワソワしている箒ちゃんとセシリアと鈴音の姿をだ。

そんな三人より先に保健室に入ってしまうのは躊躇われた。

しかも、ちょうど出てきた織斑先生に見舞いかと問われた時、つい通りかかっただけだと言ってしまった。

それなら一次移行（ファースト・シフト）したＩＳのデータを取るからと連行されてしまった。

口ぶりからすれば、一夏のお見舞いだったら邪魔はしないと言われているように聞こえた。多分気のせいだ。

そんな訳で、ＩＳのデータを取り終えた後自室に戻ってきていた。

セシリアはまだ戻って来ていない。まだ保健室付近で彷徨いているのだろうか。

個人的に誰を応援したりするつもりは無い。逆に言うと一夏が誰を選ぶかにも干渉はしないつもりだ。

ただ、これ以上一夏を好きになる人が増えるのはどうかと思うの

だ。
勿論、それを否定する訳じゃないし、立場上増えるは間違いない。
けど、僕が一種の防衛線になろうと思う。
本気で好きになったりするのはいい。それで後悔するのは全然有りだ。
でも、本気じゃないのに深みに嵌ったりとかするのは可哀想だ。
その子も、一夏も。
出過ぎた真似なのは分かっている。それくらいしないといけないくらい一夏が鈍感だから悪いってことにする。
本音半分、冗談半分。

僕は一夏の友達だ。
友達。その言葉は前の自分には余り馴染みがなかった。そのことを思い出すだけでも泣けてくる。
「友達ってさ……」
なんなんだろうな？どこからどこまでを友達って言うんだろ。
声に出なかった質問は首元、一次移行して桜色に透き通った花びら型のクリスタルがついたチョーカーに向けられたものだった。
そのチョーカー、待機状態のＩＳ『桜華』は何も答えなかった。

アフター・ナイト―戦いの後で―（後書き）

篠ノ之箒だ。
一夏と同じ部屋から引越しさせられてしまった。
しかし、遂に言ってやったぞ。これで来月のトーナメントに優勝すれば……
それに、今度は料理も失敗しない！
見ていろよ一夏！
次回「ブロンド・アンド・シルバー―金と銀の二人―」
絶対に一夏は――

ブロンド・アンド・シルバー―金と銀の二人―（前書き）

かなり行き当たりばったりで書いてるからどっかで矛盾してるかも……

織村先生と山田先生の出番がかなりの確率でカットされているのは明日香が二人はあくまでも先生だと思っているからです。

他意はありません。

ブロンド・アンド・シルバー―金と銀の二人―

「「あ」」
食堂で朝食を摂っていると鈴音が現れた。鈴音は持っていたトレイを置くと僕の隣に座った。
鈴音とはからあんまり喋った記憶がない。
というよりも鈴音が転校してきてからまともに会話した記憶はない。
そもそも一夏が間に入った関係で、友達の友達が精一杯。
それにＩＳ襲撃事件以来一夏とは距離ができてしまっている。
なんだかちょっと気恥しくて。
「あんた篠ノ之明日香よね？」
「そうだけど？」
二人並んでご飯を食べる。なんだか変な気分だ。
「あんた最近一夏を避けてるわよね」
「……そうかもね」
このままじゃ駄目だって自覚はある。あるから悩んでるんだ。
「あんたは一夏が好きってわけじゃないのね？」
「うん。やっぱり鈴音は一夏のことが好きなんだね」
「ばッ……。なんでわかんのよ」
「そんなこと聞かれれば誰にでもわかるよ」
「……あんたなかなかやるわね」
「そりゃどーも」
食べ終えたのでトレイを持って席を立つ。
「ちょっ、待ちなさいよ」
慌てて付いてくる鈴音。仕方ないので少し待ってやる。
二人並んで登校する。いつもとちょっと違う朝の時間。
「それで、なんか用事？鈴音さん」

「一緒に登校しちゃ駄目なの？それと鈴でいいわよ」
「は？」
「だから名前。鈴でいいって」
「いや、なんで……」
ちょっと突然の親しみに戸惑いを覚えた。どれだけ小心者なんだろう僕は。
「あんた一夏の友達なんでしょ？一夏も心配してたし。あんたが一夏の友達ならあたしとも友達でいいでしょ？」
いや、なにその強引な理論。後、友達を妙に強調したような……
でも……
「……そうだね。よろしく鈴」
一夏が心配していた。それはちょっと想定外だった。
やっぱり僕は自分のことしか考えていないんだ。

朝のＨＲ、今まで賑わっていた教室は織村先生の一声で静かに変わっていた。
織村先生の連絡事項も半ば上の空で聞いていた。
さっき久しぶりに一夏と話をした。大した話でもなかったけど、それだけで十分だった。
心配をかけてゴメン。
たったそれだけ、でも言いたいことが言えた。伝えたい思いを伝えることができた。
話をする時間ならこれからいくらでもある。
そんなことばかりを考えていた。だから、山田先生の言葉も聞き逃したし、突然教室がざわついたのに驚いた。
一体何？という疑問は周りの会話ですぐに晴れた。聞き取れた単語は転校生。

そして教室のドアが開く。
「失礼します」
「……」
入ってきたのは二人。その姿を見て教室のざわめきはピタリと止まった。
僕はそのそのうちの一人を見て胸がドキンと高鳴ったのを感じた。
きっと驚いたからに違い。だってその生徒が男だったから。

ブロンド・アンド・シルバー―金と銀の二人―（後書き）

はろはろー束さんだよー。
最近出番がないけど忘れられたりしてないよね？もし忘れられてたらショックだしちょっと存在感アピールしとこうかな？
次回「セーフ・オア・アウト―大丈夫？―」
よーしそうと決まれば準備準備っとー。

セーフ・オア・アウト―大丈夫？―（前書き）

だいぶ時間が開きました。
が、その分良いものが書けたかと言われればＮＯですかね？

セーフ・オア・アウト―大丈夫？―

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、金髪の方は爽やかに挨拶をした。

クラス全体が唖然とした雰囲気を醸し出している。しかし、僕の動揺は他の生徒のとは少し違うようだ。

何といっていいか……。一目見た瞬間、胸にドキンと来たような信じがたい感情だ。

「お、男……？」

クラスの誰かが呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

そう、男。

中性的な顔立ちで、金色の髪を首の後ろで束ねている。華奢な体で女のようにも見えなくもないが、ズボンを履いていて（もう一人の転校生も履いているがそっちは明らかに女）その立ち振る舞いは男のもの。強いて言うなら『貴公子』だ。

本人が男と言っているのだから男で間違いはないのだろう。

問題なのは寧ろ自分の方なのか……？

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああーーーーっ！」

女子の歓喜の声が教室を満たす。脳に響くような甲高い声が鼓膜を震わせる。

「男子！二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれてよかった～～～！」

僕は元気いっぱいなクラスメイトのテンションに全くついていけなかった。もっと深刻な別の問題が僕にはあった。
「あー、騒ぐな。静かにしろ」
「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」
もう一人の転校生は男子でこそないが、個性的だった。
小柄な体にシャルルの金髪に対をなすような銀髪を腰まで長くおろしている。
引き締められた口元に威圧するような赤い右目、極めつけは黒い眼帯。
なんというか……。軍人？みたいな子だ。
「……挨拶をしろ、ラウラ」
「はい、教官」
教官って……。もしかして本物の軍人ですか？
織斑先生もまた、面倒くさそうな顔をしている。
「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織村先生と呼べ」
「了解しました」
銀髪の転校生（ラウラと言うらしい）の動きは文句のつけようがないくらいキッチリしていた。あれは完璧に軍人さんだ。
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」
「……」
……あれ、終わり？
「あ、あの、以上……ですか？」
「以上だ」
最大限の笑顔で、僕とその他クラスメイトの心の声を代弁してくれた山田先生はあっさりと敗北。なんだか泣きそうな顔をしている。
「！　貴様が――」
そこで何かに気づいた様子のラウラ。その視線の先にいるのは一夏？
迷う様子もなくつかつかと一夏に近づくとそのまま右手を振り上

げ――

バシンッ！

容赦ない平手打ち。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

クラスメイトどころか、一夏本人まで呆然としている。察するに一夏にも身に覚えのないことのようだ。

「いきなり何しやがる！」

って、一夏反応が遅いよ！？

「ふん……」

一夏の反応を気にも止めず空いている席に腰を下ろすラウラ。

無視とか……。一夏には悪いがあまり関わり合いたくないなぁ。

「あー……ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐ着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

転校生の自己紹介に時間を取ったためかいつもとは違うＨＲとなった。まあ、普段のＨＲも出席確認と連絡事項位だから、転校生のことを連絡事項と捉えれば同じかもしれない。

「おい織斑。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう」

その言葉を聞いたとき、落ち着きを取り戻しつつあった心臓が再び跳ねた。

目をやった先には一夏がシャルルの手を取って教室を出ていく姿が見えた。教室では女子が着替えを始めるからだ。

「ちょっと、聞いてますの？　明日香さん」

「え、ゴメンなに？」

気が付けば傍らに不満そうな顔をしたセシリアがいた。

「だから、あのラウラ・ボーデヴィッヒって人はいったい何者かって話ですわ！いきなり一夏さんを叩くなんて」

「あ、ああ。そうだね……」

セシリアには悪いがそんな話題は今どうでもよかった。
この胸に芽生えた形容しがたい感情。
「ちょっと大丈夫ですの？　元気がありませんわよ？」
けど、僕は一夏ほど鈍く無いようだ。この感情に見当が付く。
「だ、大丈夫……。ちょっと……悩み事かな？」
しかし、見当はつくがむしろそのほうが問題かもしれない。
「そう……。無理はなさらないでくださいまし」
「あ、ありがとう……」

僕がシャルル・デュノアを見たとき。
その感情は溢れ出した。
感情は衝撃を伴って全身を巡り、心臓を強く叩く。
僕は知っている。この感情の名を。

これは恋だ。それも一目惚れって奴に違いない。
その相手は男だったことを除けば、運命の出会いだとさえ言いたかった。
僕は体が女になって、いつしか女の体にはあまり関心が薄くなっていた気もしないこともない。
しかし、よりにもよって男に惚れてしまうとは。
その気持ちを否定したい男の部分と強く否定はしないそれ以外の部分が頭の中を巡っている。
もはや後戻りできないところまで来てしまったのではないかという気がしていた。

セーフ・オア・アウト―大丈夫？―（後書き）

セシリア・オルコットですわっ。
あのラウラという女性は本当になんなのでしょうか？
それに明日香さんの様子もおかしいようですし……
次回「レッド・カード―やりすぎ注意―」
なんにせよ一夏さんは渡しませんのよっ！！

レッド・カード―やりすぎ注意―（前書き）

あ、レットカードは注意じゃないか……

レッド・カード―やりすぎ注意―

昼休み。僕は未だに結論が出せずにいた。
僕は男だ。いや、女なのか？　男だった？　一体どっちなのだろうか。
おかげで授業は頭に入ってこない。
先生には怒られまくったし、果てには保健室に行くようにまで言われた。
ダイジョウブデス、ダイジョウブデスと繰り返してはいたが、何が大丈夫なものか。
先生にもクラスメイトにも心配をかけていることの方が悪い気がした。

昼休みは昼ご飯を食べる時間だ。当たり前の事だが、今日の僕はそんなことも忘れかけていた。
セシリアに促されなければ昼休み中、呆然としたままだったかもしれない。
だが、フラフラとセシリアに付いてきたのは失敗だったかもしれない。
場所はきれいに整備された屋上。
テーブルや椅子まで用意されていて昼ご飯にはもってこいだ。
しかし今日は天気も良いのに、なぜか他のグループの姿はない。

いや、失敗という表現は少し違うかもしれない。
これは偶然の出来事なのだから。
セシリアに連れられて屋上に行くと一人、鈴が座っていた。手元には包みがあり、まだ手を付けていないところを見ると人を待っているようだ。
そんなことを考えているとセシリアが鈴の隣に腰を下ろした。

二人は仲が良かったっけ？　と思いつつ僕も鈴の隣、セシリアとは反対側に座った。今朝、鈴と友達になったのだから話がしたかったのだ。
二人で待ち合わせをしていたのかと聞こうとしたがお互いに威嚇するような雰囲気を発していたので口を噤んだ。
次に屋上に現れたのは箒ちゃんだった。
三人並んで座っているのを見て箒ちゃんは眉を顰め、セシリアの隣に座る。
ここまで来てようやく分かった。一夏がここに来るのだ。
だから箒ちゃんもセシリアも鈴も屋上に来て、しかも同じテーブルにつくんだ。
理由がわかると、その沈黙の裏にある心の声も聞こえてきそうだ。

「悪い、遅くなった」
ようやく一夏が現れた。
沈黙に耐えかね、早く一夏が来てくれないかと思っていたが、その期待は一瞬で砕け散った。
冷静に考えれば当然だが、一夏はシャルルを連れてきた。
その顔を見て、冷静ではいられなくなった。
勿論二人も同じテーブルに付く。時計回りに鈴、セシリア、箒ちゃん、一夏、シャルル、そして僕。
よりにもよって隣に座ること無いじゃんか！！
再び思考がループを始め、感情が渦巻く。
結果、あることに思い至った。
「あ、弁当持ってない……」
セシリアにくっついて購買にも行ったのに、なぜ気がつかなかったのか、どれだけ混乱していたのだろう。
「本当に大丈夫か？　今日は一日ボーっとしてるけど」
「う、うん。大丈夫。じゃあ僕、購買行ってくる。もう戻ってこないかもしれないから気にしないで食べてて」

一夏の気遣いもありがたいが、ここは逃亡させてもらう。
「あ、待って。購買は人が沢山いたよ？　もう売り切れてるかも。よかったらひとつ食べない？」
シャルルは遠慮がちに言った言葉が僕を引き止めた。
さり気なく、しかも優しい提案は心を蝕む毒にすら思えたが、とても断れなかった。
「は……はいぃ」
僕は弱々しく頷くことしかできなかった。

結局、逃亡は叶わず。シャルルの行為に甘え、貰ったパンを小さく齧る。
隣には優しき貴公子。内面から滲み出るような雰囲気も含め非の打ち所が無い。
おかしいのは自分なのだ。
「君は篠ノ之明日香さんだよね？」
「知ってるの？」
「午前中、よく怒られてたからね」
漂ってくる優しい香りとかも、多分購買で人気の『クイーン・クリーム・デニッシュ』の臭いだ。
「う、それは……」
「ふふっ、ゴメン。冗談だよ。君は専用機持ちだからね、結構有名だよ？」
「……意地悪」
一夏は助けてくれない。というか一夏も大変そうだ。
「改めて自己紹介するよ。僕はシャルル・デュノア。よろしく」
優しげな眼差しを直視できず、思わず目を逸らした。
「でも、本当に大丈夫？　なんだか顔も赤いよ？」
そう言ったシャルルはすっと手を伸ばし僕の額に添える。
あまりに自然と伸びてきたその手を避けられず、しかも声も出せない。

柔らかな手の感触と温もりが感じられる。むしろ赤くなっても当然なんじゃないだろうか。
「んー。ちょっと、分かりづらいな……」

コツンッ

シャルルは前髪をかきあげると僕の額にくっつけた。すぐ目の前に目をつぶったシャルルの顔がある。
ちょっと待って、それはもうレッド・カード！！
顔が熱いなんてもんじゃ無い、血液が沸騰するかのようだ。
「……うーん。熱は無いと思うけど」
額が離れ、拘束が解かれる。魂まで引っこ抜かれそうだ。
目の前までズームアップしていたシャルルが離れて、もう一度今の状況を思い直す。
「あ……あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
もう、いてもたってもいられない。即刻この場を離れたくなった。
椅子が倒れるのも、食べかけのパンにも気に留めず駆け出す。
目指すは出口ではなく、背丈ほどある屋上の柵。
「ちょっと！　どうしたの！？」
後ろから聞こえる声も振り払い、ぐっと踏み込む。そして、走る勢いは殺さず跳躍する。
ガシャンっと音を立て柵の上端を足が捉える。
それまでは前に進むようだった勢いは柵を捉えた足を支点に上方向へと変換された。
くるりと前方に回転して屋上の外に躍り出る。下を見ても地面はない。
重力に引っ張られ自由落下が始まる。このままでは頭から真っ逆さまだ。
もちろん、そのまま天国まで行くつもりもなく。落下の途中でＩＳを展開。

自分の可能な、最高速度でこの場を離れたかったのだ。

恥ずかしい気持ちを受け止めることができなくて。

レッド・カード―やりすぎ注意―（後書き）

織斑千冬だ。
全く……。転校生が二人も来て、しかも専用機持ちで、どうして同じクラスに入れられるのだ！
普通別のクラスに振り分けるだろうに……。
権力なんてくだらんものだよな？
次回「プレゼント・フォー・ユー―贈り物―」
なに？　ＩＳの無断使用！？　どこの馬鹿者だそれは！！

プレゼント・フォー・ユー―贈り物―（前書き）

眠い……。

―力尽きました―

プレゼント・フォー・ユー―贈り物―

キーンコーン、カーンコーン。

遠くチャイムの音が聞こえてきた。もうすぐ午後の授業が始まるのだろう。

今更教室に向かっても間に合わないだろう。

僕は今、寮の自室にいた。

あまりの恥ずかしさにみんなの前から逃げ出してたのだ。

……ボッ！！

はっ恥ずかしい！　思い出しただけで顔が熱くなる。

ブンブンと首を振って、思い出してしまった記憶を振り払う。

ううっ……。しばらくは落ち着くことが出来そうもない。

こんな調子ではみんなと、特にシャルルと顔を合わせられない。

もういいや、今日はこのままふて寝してしまおう。明日、先生になんて言われるかは考えたくも無い。

寝逃げだ、寝逃げ。そう思った時それに気づいた。

僕の机の上に置かれた小包だ。

それ自体は問題ない。普通の包み。でも、朝は無かったと思う。

宅配便なら寮の入口で受け取ることになっているし、この部屋は鍵もかかっていた。

なんだか密室殺人のトリックみたいな状況だが、幸い被害は無い。

こんな意味も無く凄いことをやってのける知り合いは一人しかいない。

この時点で嫌の予感がひしひしと感じられる。

近づいて観察してみる。

宅配の伝票のように見えていた紙は、それに似せて作られた手描

きの紙だった。なんと無駄な努力。
勿論、差出人は篠ノ之束。しかし、宛先は予想とは違っていた。
『桜華様へ』

意味がわからないので取り敢えず開けてみることにした。
中から出てきたのはタブレットＰＣとスマートフォンのようなものだ。どちらも鮮やかなサクラ色をしている。
同封されていた紙には取扱説明書と書いてあるが、電源の入れ方しか書いてない。
一通り見てみたところ市販のものではなさそうだが、特に変わったところもない。
一応電源を入れてみることにした。まずは大きいほうから。
指示に従いボタンを長押しすると、ふっと画面に光が灯る。
ほとんどラグを感じさせない立ち上がり。そのまま何かのアプリケーションが起動したようだ。
初期設定、接続、と次々に画面は移り変わり最後に完了という文字が表れ、消える。
後には、右下に小さなタスクが一つのデスクトップに戻った。なんだろうＳｏｕｎｄ　Ｏｎｌｙって。
よく見ると背景にはうっすらと『桜華』の文字が浮かんでいる。

『あ、あ、音声テスト、音声テスト。スピーカーに以上は無し』

突然聞こえた声に驚く。タブレットのスピーカーから発せられた音は聞き間違いようのない。
「桜華！？」
『はい。マスター』
「いや、はい。じゃなくてどうして！？」
桜華はＩＳの補助ＡＩ、人口知能だ。

その特性上、会話出来るのはＩＳを起動しているときのみ。
今のようにＩＳが待機状態のままで喋るなんて思っても見なかった。
『篠ノ之束様特製、ＩＳ式ＡＩ桜華専用デバイスです。やっと届きました』
「は、はぁ」
詳しくはわからないが何か凄そうだ。
『取り扱い説明について後で確認してください。それから、束様よりメッセージを預かっております。
〈やっほー。元気にしてるかな？　これは無事に誕生した桜華ちゃんへの誕生祝いのプレゼントだよ！　明日香ちゃん。仲良くしないとダメだよ？　じゃあ、まったねー！！〉とのことです。』
「なるほどね……」
誕生祝いのプレゼント。つまりバースデイプレゼントってことだ。
やってることは無茶苦茶でも、やっぱり嫌いにはなれない。基本いい人だと思う。
『それから、マスターに言いたいことが一つ……』
「なに？」
『ずっと、言いたかったんです』
そう言うと画面上にブラウザが開かれる。なんとインターネットまで出来るらしい。
開いたページはネット百科事典のようだ。
『それは１９４４年に開発され、１９４５年に実践に投入されました。数々の問題を権力者の無茶で押し通し、外国からは馬鹿爆弾と通称された。航空特攻兵器、有人誘導式ミサイル。その名を桜花。ご存知ですか？』
「い、いや。かけらも、全く知りませんでした……」
お、怒ってらっしゃる……！！　声に全く変化はないけど、このＡＩ完全に怒ってる！！
『……でしょうね。知っててつけてたら、ただの自殺志願者ですね。

漢字も違うので良しとしましょう』
怒りの気配が落ち着くのを肌で感じて胸をなでおろす。
思えば、まともに会話するのはこれが初めてかもしれない。
ＩＳの起動は基本制限されているので、今までは授業中か自主練中しか出てこない。授業中はお喋りできいないし、自主練中は意見をぶつけ合っている。
感覚派の僕と理論派（プログラムだから当然）の桜華では考え方が根っこから違うからだ。
性格が正反対とさえ言える。一言で表すなら、僕が自由。桜華は規律。
『それにしても、さっきのは何だったんですか……』
なんだか、小煩い隣人が出来て、身の回りの騒がしさが増していく予感がしていた。

プレゼント・フォー・ユー―贈り物―（後書き）

『桜花』の話はＷｉｋｉｐｅｄｉａより。
本当に知らなかったんです。ごめんなさい。

桜華です。
全く、マスターには困ったものです。
言い訳を重ねるだけならまだしもあんなことまで言って。
次回「ハプニング・ショック―事故と驚きと―」
いつか見返してやります。覚悟しやがってください。

ハプニング・ショック―事故と驚きと―（前書き）

更新がここまで遅れた理由の大部分は忙しかったからです。何が、とは言いませんが三年生の自分には様々なことがあったりなかったり。

残りの部分はモチベーションの低下ってやつです。飽きっぽい性格ですので。

ですから言い訳だと思ってもらっても結構です。

ハプニング・ショック―事故と驚きと―

桜華のデバイスが届いてから五日が過ぎた。もっと言うならあの日はシャルル（とラウラ）が転校してきた日であり、校則を破ったり午後の授業をサボったりした日から五日。

織村先生にこってり絞られたりもしたがそれは余談。

一夏達とは距離が出来たまま。というより僕がシャルルから逃げ回ってるだけだ。不登校になっていないのは織斑先生の存在と桜華が欠席を許してはくれないからだ。桜華には体調もモニタリングされているので仮病は通じない。それに心の調子は管轄外らしい。

しかも、「マスターにはもっと経験が必要」という理由からＩＳの訓練も休みなし。ＩＳは稼働時間の長さはかなり重要視されているので反論もできず、唯一の抵抗が一夏達と場所がかぶらないようにすることだけだった。

ゲート内で桜華を展開させる。すると眼前に次々と情報が表示される。アリーナで稼働しているＩＳのデータだ。それなりの数の訓練機に混じって表示されたのは専用機の集団、一夏達だ。場所の都合からこうしてブッキングするのは予想していた。だからと言ってどうしようもないので、出来るだけこっそりと入って隅の方で訓練することのする。

その時、ふと目に入ったのは、専用機『シュバルツェア・レーゲン』操縦者『ラウラ・ボーデヴィッヒ』。

もう一人の転校生、そんな考えが頭をよぎった次の瞬間、そのＩＳからの熱源反応。

『実弾銃撃、対象は白式。ただし白式は戦闘態勢をとっていません。トラブルでしょうか？』

ゲートの外の見えないとこまでそんなに詳しくわかるのかというツッコミは心の中に留めたまま、反射的に動き出していた体がゲートをくぐる。そこで目にしたのは対峙するラウラと、シャルルだった。

「フランスの第二世代型（アンティーク）ごときで私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型（ルーキー）よりは動けるだろうからね」

その二人の睨み合いに僕は全く動けずにいた。

一夏が攻撃されたというだけの理由で反射的に出てきたのはいいが、出てきてどうするのかまでは考えていなかったからだ。

『そこの生徒！　何をやっている！　学年とクラス、出席番号を言え！』

二人の睨み合いに割って入ったのはスピーカーから響く教師の声だった。

「……ふん。今日は引こう」

ラウラはそう言って踵を返し、アリーナのゲートに消えて行った。なんだかちょっとカッコイイ？

なんだかちょっと焦り気味にゲートを出てきた自分が間抜けに思えた。

『マスター。何をぼさっとしているんですか？』

「え、ああ、そうだね。訓練しないとね……」

『はぁ。今日のアリーナの閉館時間が少し早いという話は聞いてなかったんですか？』

「えぇ、嘘！？」

じゃあ、本当に僕は何しにここへ来たのさ！？

『全く、人の話を聞いてないからそうなるんです』

「う、ゴメン……。て言うか言ってくれればいいのに」

『人の所為にしないでください』

若干の言葉の刺を受けつつ入ってきたゲートを引き返し、手早く着替えた。夕食の時間までポッカリと空いてしまったけどどうしよ

う？

取り敢えず寮に戻ることにして、その途中で行きたい場所を思いついた。一夏のところだ。

さっき一夏の身の危険（かと思った）に体は勝手に反応していた。

一夏達との距離は自分が作ったものだったが（理由はシャルルを直視出来ないから）それでも一夏はいつも通り接してくるし、セシリアにも心配してくれているようだ。

一夏の側にいたい。それが偽らざる本音だったのだ。勿論友達として。

シャルルのことはどうにか折り合いをつけなきゃいけないだろう。そういうことも友達に相談するのがベターな解決法と言えるだろう。

自分を納得させる言い訳を考えながら直接一夏の部屋へ向かう。

「ねえ、桜華」

道すがらパッドを通して桜華に話しかける。画面表示は相変わらず『Ｓｏｕｎｄ　Ｏｎｌｙ』の文字。いや、それ以外何があるのさって話だけどさ。

『なんですか？　こっちは忙しいんですが』

「忙しい？　何をしてるんの？」

『ブログの更新です』

……は？

うちのＡＩの自由さには些か驚かされたが、その他に道中変わった事もなく、一夏の部屋の前までたどり着いた。

……ここから先へ一歩進むのが難しいのだ。

そう感じつつ、後に引く訳にもいかない。よし、まずは深呼吸だ。

スゥ～～、ハァ～～。スゥ～「ん？　明日香じゃないか何してる

んだ？」ビクゥッ！！！　「ゲホッ！　ゲホッゲホッ！！」
深呼吸→背後から突然現れた一夏→声も出せずに驚く僕→むせた。なかなかに心臓に悪いコンボが炸裂した。しかもボーナスで喉への追加ダメージ付き。
「だ、大丈夫か？」
「……だ、大丈夫。多分」
大丈夫とは言ったが一夏はまだ心配そうな顔をしている。涙目になってゲホゲホしている姿はとても大丈夫そうには見えないらしい。
「それよりも一夏、まだ部屋に戻ってなかったんだね」
「ん？　ああ、ちょっと先生に呼ばれててな。明日香はどうしたんだ、用事か？」
「あ、うん。ちょっと話がしたくて」
「そっか。じゃあ、中入っててくれよちょっとシャワー浴びさせて貰うけど、お茶出すからさ」
「あ、ありがとう」
厚意に甘えて一夏の後に続き部屋に踏み入る。なんてことはない普通の一歩だった。
「ただいまー。って、シャルルがシャワー使ってるのか。あ、そこの椅子にでも座っててくれ。あーボディソープ補充するの忘れてたな……」
一夏がテキパキと動く中、緊張のせいか言われたとおりに椅子に座ることしかできなかった。ただ、ぼんやりとシャルルがシャワー中と言う言葉の意味を理解しようとしていた。
「きゃあっ！？」
そんな可愛らしい声が聞こえたもののボンヤリとした思考を断ち切ることは無かった。ただ、その後、赤く変な顔をした一夏が脱衣所から出てきて立ち尽くしている姿には疑問を覚えた。
ボンヤリとした頭が次第に冷静さを取り戻し、この状況がおかしいことに気づき始めたとき、ガチャリという音が部屋に響き一夏の体がびくりと跳ねた。

そして、一夏の肩越しに脱衣所から出てきた女子の姿が目に写った。

あなたは一体誰ですか……？

ハプニング・ショック―事故と驚きと―（後書き）

今の心境を少し話したいかと思います。

せめて、きちんと完結させたいです。

アニメと同じように原作三巻を目処にとか考えています。せめてそこまではいかないとダメな気もするし。もしかしたらそこからｓｅｃｏｎｄｓｅａｓｏｎみたいな事をしてもいいんですが、取り敢えず年内にそこまでは行きたいと思う。

全ては夏休み中の頑張りにかかってる……

１５部～１９部までのタイトルがひっくり返っているのに今更気づいたので修正。

シャルル……です。

えっと……ごめんなさい。

次回「デープ・ダーク―深くて暗い―」

僕は、みんなを騙してたんだよ。

デープ・ダーク―深くて暗い―（前書き）

サブタイトルが変更されました。ちょっと届かなくて……

それと、もうお気づきかもしれませんがヒロイン（？）はシャルです。

デープ・ダーク―深くて暗い―

長い沈黙が続いていた。
一夏とシャルルはそれぞれのベットに、そして僕は一夏の椅子に座っている。
誰もが混乱しているのがわかる。何を話していいのかはわからない。
目のさまよい方から推測するに、一夏とシャルルの混乱は相当深刻そうだった。
対して僕は考える余裕があるくらいには回復している。
というのもシャルルが出てきた後の桜華との会話（個人秘匿通信（プライベート・チャンネル）回線で一夏達には聞こえない）が原因だった。

『何を驚いているんですか？』
だってこの女の子がシャルルなんでしょ？　そりゃ驚くよ。
『ＩＳは女にしか使えない。当然でしょう？　特別なのは一夏様だけです』
そりゃそうだけど……って桜華は知ってて黙ってたのかよ。
『私には男女という区別に興味はありませんので。マスターが女だろうと元男だろうと関係ありません』
……僕は話してないよね？
『束様曰く、マスターと私は裏表なんだそうですよ』
意味わかんないし。

と、まあ桜華が万能で優秀なのがよくわかったところで現在に至る。
冷静さを取り戻したことによって、今まで出来なかったパズルを完成させることが出来た。

今まで悩んでいたのも当然だった。なにせパズルのピースの形が間違っていたのだから。
つまり、僕はシャルル（男）にときめいていたのではなく、シャルル（女）にときめいていたわけだ。
一目惚れとさえ言ってもいい。
なんだか少し違和感もあるような気がするが、まあいい。
謎は全て解けた！僕は間違っていなかった！！

「あー、その……。お茶でも飲むか？」
沈黙を破ったのは一夏だった。さすがは主人公体質と言っておこう。やはり停滞した物語を打ち破るのは彼の役目と言っても過言ではない。
「う、うん。もらおうかな……」
シャルルの同意も得て一夏はお茶を入れる準備しようとする。
「あ、待って一夏」
正直ここでは大人しくするつもりだったが無理だった。
「僕が淹れるよ。こだわりがあるんだ」
有無を言わさず役目を変わる。その時一夏の耳元で小さく頑張って、と念を入れるのを忘れない。
僕はお茶の準備をしながら横目で一夏の顔を伺う。どうやら覚悟は出来たようだ。
「なんで男のフリなんかしていたんだ？」
「それは、その……実家の方からそうしろって言われて……」
「うん？　実家っていうと、デュノア社の――」
「そう。僕の父がそこの社長。その人から直接の命令なんだよ」
シャルルの声は重く、顔色は暗い。あれは嫌なことを話す顔だ。
「命令って……親だろう？　なんでそんな――」
熱くなりかけている一夏の肩を叩く。
「お茶。熱いから気をつけてね」
そう言って湯呑を二人に手渡す。こだわっているとは言ったがそ

れは方便だ。ここには道具もないし、そもそも味わうような雰囲気では無い。
それぞれ、少しづつ日本茶を口にする。一夏も落ち着いてくれたようだ。
「僕はね。愛人の子なんだよ」
その言葉を口にしたシャルルの顔を見ていることは出来なかった。
母が死んだのが二年前。デュノアに引き取られはしたが厄介もの扱い。ＩＳ適正が高かったので会社でテストパイロット。デュノア社は経営難。会社の広告塔として目立つように。そして、一夏に接触しそのデータを盗みやすいように。男装。
それが、シャルル・デュノアの秘密。
転校たった五日で『ブロンドの貴公子』とか呼ばれるようになったシャルルの内面。
親との間に愛は無く、利用されるだけ。
余りにも、悲しすぎた。
「とまあ、こんなところかな。でも一夏達にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみちいままでのようにはいかないだろうけど、僕にはもうどうでもいいことかな」
「……」
「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついててゴメン」
シャルルは深々と頭を下げたが一夏は肩を掴んで顔を上げさせた。顔が近い、これはフラグの予感がする。
「いいのか、それで？」
「え……？」
「それでいいのか？　いいはずないだろ。親がなんだっていうんだ。どうして親だからってだけで子どもの自由を奪う権利がある。おか

しいだろう、そんなものは！」
「い、一夏……？」
シャルルは怯えた表情をしている。本来ならこの時点で一夏を止める理由になるが、感情の溢れ出すような一夏の顔がそうはさせなかった。後、やっぱり顔が近いぞ。
「親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！　生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。それを、親なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」
だ・か・ら。
「顔が近いわーーー！！」
カッコ良く決まった所で悪いが我慢も限界だ。一夏の脳天にチョップを入れる。ほぼ全力に近いチョップだった。
「あ、あだだ……悪い。つい熱くなってしまって」
「い、いや、いいけど……本当にどうしたの？」
「俺は――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」
「あ……ゴメン」
「気にしなくていい。俺の家族は千冬姉だけだから。別に親なんて今さら会いたいとも思わない。それより、シャルルはこれからどうするんだよ？」
「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もこのことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は代表候補生を下ろされて、よくて牢屋とかじゃないかな」
「違うよ。シャルルがどうするか……どうしたいかを聞いてるんだよ」
「……どうにかしたくても、僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ」
僕の問いにシャルルは痛々しい微笑みを見せた。もうこんな顔は見たくなかった。だから僕は桜華に頼った。
『特記事項第二十一』

優秀な桜華の選んだ方法がパッドのスピーカーから流れる。
『本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。……マスターは頼ってばっかりいないで、もっと勉学にも励んでください』
「一言多いよ、桜華」
全く、優秀な相棒だこと。
「――つまり、この学園に入れば、すくなくとも三年間は大丈夫なんだな。それだけ時間があれば、なんとかなる方法だって見つけられる。別に急ぐ必要だってないだろ」
「そう、一夏の言う通りだよ。だから、もう一度聞くよ。シャルルはどうしたいの？」
選ぶ権利はシャルルにあった。というか、むしろシャルルにしか選ぶ権利はない。後はシャルルが決めることだ。
シャルルの目には、うっすらと涙らしき輝きがあった。そして、その表情は今までとは真逆、屈託が無い純粋な微笑みがあった。
この表情を失いたくない。僕はそう思った。
「みんな、ありがとう」

デープ・ダーク―深くて暗い―（後書き）

唐突に芽生えるモチベーション。
基本不安定な正確なので……

セシリア・オルコットですわ。
シャルルさんは環境の変化に体調をお崩しになられたんでしょうね。
最近変だった明日香さんにも何かあったようですし……
次回「ポイント・オブ・ノーリターン―引き返し不能地点―」
……なんだか仲間外れになってませんこと？

ポイント・オブ・ノーリターン―引き返し不能地点―（前書き）

なんだかグダグダな気がします。
寝不足気味なのが悪いんでしょうか？

しかし、今日はなでしこＪＡＰＡＮの決勝見るまで寝れない！

ポイント・オブ・ノーリターン―引き返し不能地点―

部屋に独特の雰囲気が漂っていた。
シャルル（と一夏）が秘密を喋ったからかだろうか。
静寂とも沈黙とも取れる状況だが、不思議と安らかな気分だ。
一番の理由はシャルルの本当の顔が見れたからかもしれない。
しかし、安らかさの反面、少々悩みが生まれた。ほんの些細なことかもしれないが、いや、些細なことではないか……
要は僕の秘密も打ち明けるかどうかだ。
今のところ知っているのは束姉と桜華だけだ。
隠さなければならない絶対的なルールはない。別にバレたら戻れなくなる訳ではない。
ただし、元の世界に一生戻れない可能性はある。
束姉を信じていないわけではないが、絶対はありえないのだ。
そうなった場合僕はどうするのだろうか？

コンコン。

静かな部屋にノックの音が響いた。
「一夏さん、いらっしゃいます？夕食をまだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」
しまった、セシリアだ。どうやら一夏を食堂で待っていたらしい。
「一夏さん？　入りますわよ？」
ちょ、セシリアが入ってくる！？
「ど、どうしよう？」
小声でシャルルが呟く。今のシャルルはどう見ても女子。セシリアに見られるわけにはいかない。
「一夏、ブロック。シャルルは布団かぶって」

二人は頷くとあたふたと指示に従って行動する。

ガチャリ。

一夏が触れる寸前、ドアが開かれた。

「よ、よおセシリア！　なんだ？　どうした？」

ドアの前で来客に対応する一夏、布団をかぶって顔も半分しか見えないシャルル、その横にいる僕。見た目上はおかしなところはないはずだ。

「あら、明日香さん？　どうしてここへ？」

「あ、いやー、一夏に話があって来んだけどシャルルが調子悪いって言っててねー……」

しまった！　聞かれてもいないことをっ！　これは怪しまれるか！？

「デュノアさん、大丈夫ですの？」

よかった。どうやら、疑われていないようだ。

「あ、ああ。たいしたことないし、寝てれば治る。夕食はいらないみたいだし、仕方ないから二人で行こうって話をしてたところだ」

「ご、ごほっごほっ」

「あ、あら、そうですの？　では、わたくしもちょうど夕食はまだですし、ご一緒しましょう。ええ、ええ。珍しい偶然もあったものです。」

一夏のフォローとシャルルのわざとらしい咳きも入り、誤魔化すことに成功した。ちなみにシャルルの演技とセシリアの演技は同レベルくらいだ。

「ごほっごほっ。そ、それじゃあごゆっくり」

「お、おう」

「デュノアさん、お大事に。さあ一夏さん、参りましょう」

「じゃあ、またね」

三人連れ立って食堂へ向かう。セシリアは一夏の腕を取って笑み

を浮かべ、一夏は困った顔をしている。
一夏が可哀相な獲物に見えた。
「なっ、なっ、何をしている！？」
その状況に声を上げたのは廊下の端からこちらへ向かってくる箒ちゃんだ。
「あら、箒さん。これからわたくしたち一緒に夕食ですの」
ああ、セシリアもそんな挑発的な発言を……
箒ちゃんとセシリアが言い争う中、一夏の視線がこちらに訴えかけてきた。
――助けてくれ。
うわ、箒ちゃんが、日本刀を取り出した。どうやら本物らしい。
――僕には無理そうだよ、一夏。……頑張ってね。
僕は半歩離れた。
さて、周りの視線を集めながらも、なんとか食堂にたどり着き、僕は覚悟を決めた。
「一夏。僕、シャルルの夕食を持っていってあげようと思う。」
「あ、ああ。いや、俺が持っていくぞ？」
「いや、いや。遠慮しなくていいよ。ちょっと話したいこともあるし、一夏はゆっくり食事しなよ、お二人と。」
ほんのりの優しさと、少なからずのやっかみを込めた言葉が一夏の退路を断つ。そもそも――
「そうですわ、一夏さん。きちんと最後までエスコートしてください」
「そうだぞ一夏、折角の他人の好意だ。甘えてもいいじゃないか」

二人がそれを許しはしない。
「じゃ、ごゆっくりー」

実際僕がどうするべきかはわからない。
話すか、話さないか。
かなり大事な選択だ。今後が大きく変化する可能性がある。引き開始不能地点（ポイント・オブ・ノーリターン）というやつだ。
ただ、誰にも打ち明けることなく生きていくのは難しいと思う。僕はそこまで強くはない。
今話さなくても、いつか誰かに話す時が来る。だったら今話しても良いはずだ。
メリットもありデメリットもある。
この二つだけならどちらかを選ぶのは難しい。でも、それ以外の要素がある。
僕はついさっきシャルルの秘密を知った。
だからシャルルになら話してもいいのではないか。それが僕の出した結論だった。

ポイント・オブ・ノーリターン―引き返し不能地点―（後書き）

時々見てくれている人がいるのか不安になります。
小心者ですからねぇ……

こんばんは、桜華です。
ここのところ私のブログは回覧者数が鰻登りです。ちょろいですね。
そろそろ次のステップに進むとしましょう。
次回「スティル・ユー―それでもあなたは―」
どなたがいいですかね？

スティル・ユー―それでもあなたは―（前書き）

寝てしまった……ｏｒｚ
歴史的な試合になったそうで。
なでしこＪＡＰＡＮ、優勝おめでとうございます（泣）

スティル・ユー―それでもあなたは―

お盆を両手に持って部屋の前に立つ。片方は自分、もう片方はシャルルの分だ。
困ったことにドアを開けることが出来ない。
ちょっと行儀は悪いが足でノックしてシャルルに開けてもらうことも考えたが、シャルルが出られるとは限らない。
仕方ないのでウエイトレス風にバランスを取って片手片腕でお盆を二つ持つ。
そうして空いた手でドアを開ける。
「シャルル、ご飯持ってきたよ」
「し、篠ノ之さん？」
濁った声は布団の中から聞こえた。もしかしてずっと隠れていたのだろうか？　だとしたらやっぱり出てはこれなかっただろう。
「うん、明日香でいいよ。篠ノ之は他にもいるから」
そういえばこの寮の部屋に鍵が付いていないのはなぜだろう？
セキュリティとプライバシーはどうした？
「ありがとう」
シャルルがお礼を言いながらお盆を受け取る。
「どういたしまして」
言いながらテーブルに座る。ここからが肝心だ。
「シャルル、よかったら言いたいことがあるんだけど聞いてくれる？」
「う、うん。いいよ」
どこかぎこちない返事だがまあ、あんなことがあった後だから仕方ない。
「あ、食べながらでいいからね。軽い気持ちで聞いてくれると助かる」

さり気なく話すハードルも下げておく。実際真面目な話なんて苦手な部類だ。
「僕は篠ノ之博士の養子扱い。でも、それ以外は不明。そんな所でしょ？」
「う、うん」
当てずっぽうもいいとこだったが、だいたい当たっているようだ。束姉が色々手を回しているのは知っていたが、そんなあやふやな情報で良く通ったものだ。
「そもそも不明も何もないんだよ。僕はこの世界に生まれた訳じゃないんだから」
「……？」
「戸籍とか記録とかに載っていないとかじゃなくて、文字通りこの世界に生まれていない。僕は別世界から来んだ」
「え、ええ！？」
さすがに驚かれるよね。さて、どうやって信じさせよう……。
「嘘じゃないよ、篠ノ之束の実験の結果、僕はこの世界にやってきた。」
「……！」
「そして帰れなくなったから、束さんを姉と慕ってこの世界で生きてるんだ」
やっぱり唐突過ぎたかな？　そう思ったときシャルルは躊躇いがちに聞いてきた。
「……どうして僕にその話を？」
「シャルルの秘密を聞いたから。フェアじゃないからね」
「……そんな簡単に話していいの？」
「簡単じゃないよ。他に知ってるのは束姉だけだし」
「……」
沈黙――はむ。うん、鰆がうまい。
「……真面目？」
「大真面目。僕はそんなに強くないから、秘密を共有してくれる人

が欲しかったんだ」
「……」
再びの沈黙――ずず。ふぅ、味噌汁もうまい。
「あれ、食べてないの？　美味しいよ？」
「う、実は箸がうまく……」
……あ！　しまった。確かに箸が使えていない。確かにあの持ち方では食べにくそうだ。
「えっと、マネしてみて。箸はこうやって持って、上の箸だけを……そう！　上手だよ、シャルル」
「あ、ホントだ。すごく使いやすくなったよ」
さすがと言うべきかあっという間に形をマスターしてしまった。後は実際に使いながら覚えていくだろう。
「明日香さん」
「うん？」
「ありがとう」
「うん」
「話してくれて」
「……うん」
信じてくれたのか……。本当にシャルルに話して良かったかもしれない。
「もう一つ、他の人がいないところではシャルロットって呼んで。それが僕の本当の名前。」
「シャルロット……。いい名前だね」
「うん。お母さんがくれた名前なんだ」
「そう……」
たった一回の食事。ほんのわずかな時間だったが、心が通った時間だった。
本当の心が……。

「あ、僕の方も、もう一つ。いや、二つか」
「何？　明日香さん」
「それ。さんづけで呼ばないで欲しい」
「うん。分かったよ明日香」
「もう一つは……。僕むこうの世界では男だったんだよ」
「うん。……え？」

スティル・ユー―それでもあなたは―（後書き）

無謀な挑戦編その一、その二、やってます。
よければそちらの方も見てやってください。

やっほ～。布仏本音だよ～。
ねぇねぇ知ってる～？　学年別トーナメントの優勝者が～うふふ～。
じかい「ビッグ・チャンス―一夏争奪―」
な～んてね～うふふのふ～。

ビッグ・チャンス―一夏争奪―（前書き）

なんだかんだで、やることの多い夏休みを過ごしています。
休みのはずなのに全校生徒が強制補習で登校している風景を見ると、心の底から間違っていると叫びたくなりました。
やっと、もうすぐ補習も終わる……。

ビッグ・チャンス―一夏争奪―

月曜日の朝の時間。いつもより少し早い時間帯。
普段から休み明けで会話の話題には事欠かないが、今日はいつもとは少し様子が違っていた。
何時もならバリエーション豊富な会話が一色に染まりきっているのだ。

曰く、月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑一夏と交際できる。

一体どこからこんな噂が流れたのかはわからないが、十中八九何かの間違いだろう。一夏の承認があるとは考えにくい。
まあ、面白そうなので放っておく。
実際、優勝の可能性があるのは代表候補生の面々だろう。つまりセシリアと鈴とシャルロット、それからラウラ。
僕は密かにセシリアでも応援しておこう。
一夏が誰かと付き合うとなれば大ニュースとなるだろうが、それも一時的なものだ。総合的に見れば騒動は少なくなるに違いない。
それに、心配するなら自分のことをだ。一応専用機持ちだから無様な姿は晒せない。
今日は一夏と一緒にシャルロットに訓練を見てもらおう。

「一夏、今日も放課後訓練するよね？」
「ああ。もちろんだ。今日使えるのは、ええと――」

「「第三アリーナだ（だよ）」」
「「わぁっ！？」」
一夏とシャルロットが左右からの声に驚いた。
箒ちゃん、一夏、シャルロット、僕の順で並んで歩いていたつもりだったがどうやら二人は気づいていなかったらしい。多少悔しい。
「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」
「そーだよー。傷ついちゃうなー」
「お、おう。すまん」
「ごめんなさい。いきなりのことで吃驚しちゃって」
「あ、いや、別に責めているわけではないが……」
本気で謝られたらそれはそれで気分が悪いんだけどね。
「それより、今日使えるのは第三アリーナだって。空いてるといいねー」
「模擬戦が一番いい訓練になるからな。早く向かおう」
ＩＳは基本的に使えば使うほど実力がますと言われいる。桜華の自我がはっきりしているからよくわかるのだが、どうやらシンクロ率のようなものがあるらしい。
どのＩＳにも自己意識的なものはあるのだと桜華はいう。桜華はその機能に特化した新しいタイプのモデリングを兼ねているらしい。
第三アリーナに近づくにつれて、なにやら騒がしさを感じた。
どうもアリーナで何かがあったらしい。
「なんだ？」
一夏もそんな様子に気づいたらしい。……まさかアリーナが使えないなんてことにはならないよね？
『マスター。アリーナにて戦闘が行われています。機体は……』

ドゴォンッ！

「「「「！？」」」」
一際大きな爆音が響く。その音にいち早く反応したのは一夏だっ

た。ピットよりも近いと判断したのか観客席のゲートを目指し駆け出した。そして他のメンバーもその後に続く。

一足先にゲートを抜けた一夏が叫んだ。

「鈴！　セシリア！」

ビッグ・チャンス―一夏争奪―（後書き）

鳳鈴音よ！
全くなんなのよあの銀髪！！
龍咆も効かないし、相性最悪じゃない！！
次回「シュヴァルツェア・レーゲン―黒い雨―」
なにか弱点とかないかしらね？

シュヴァルツェア・レーゲン―黒い雨―（前書き）

ＩＳ名はカタカナだと長くなりがちなので漢字で。わかりにくいですかね？

シュヴァルツェア・レーゲン―黒い雨―

淡い光が一夏の体を包み、瞬時にＩＳの展開を完了させた。その右手にはすでに雪片弐型が握られている。

一夏は感情のままに零落白夜を発動させアリーナのバリアを無効化した。そして躊躇うことなく戦場へと飛び出した。

――そう、戦場。

一夏の後を追ってアリーナの全体を見渡せる場所まで駆け寄った。アリーナでは四機のＩＳが対峙していた。

『四機のＩＳ、蒼い雫（ブルー・ティアドロップ）に甲龍、白式。それから黒い雨（シュバルツェア・レーゲン）です』

それくらい見ればわかる。というつっ込みは胸の内引っ込めた。今、つっ込みは不要だ。

低空にダメージが見られる蒼い雫と甲龍がいる。そして二人が見上げる先、見下すような視線を向ける黒い雨、ラウラ・ボーデヴィッヒ。それから黒い雨に向かって空を駆ける白式。

「一夏ッ！！」

誰かが叫ぶ。それが誰の声かは定かではない。箒ちゃんかシャルロットかセシリアか鈴音か自分か、あるいはラウラか。

「うぉぉぉおおお！！」

一夏は何も後先考えないで特攻している。それは感情に任せた単調な動きで――

「我が停止結界の前では無力だ！！」

ラウラにあっさりと捕まってしまう。

『ＡＩＣ（慣性停止結界）です。エネルギーで空間に働きかけているようです。』

「良くわかんない！！　そういうのは後で聞く！！」
そう言いながらＩＳを展開させる。突発的な出来事だからと言って対応が遅すぎる。このあたりも経験の差なのか、シャルロットはすで飛び出していた。
「ふん、やはりその程度か」
距離をとった一夏の代わりにシャルロットのマシンガンがラウラを襲うが、その弾丸は付きだされた手の前、おそらくＡＩＣとやらで止められたのだろう。
（だったらこれでどうだ！　桜華！！）
軽装甲の高機動が桜華の特徴の一つ（単に装甲が薄いと言っても過言ではないが）白式以上の速さでフェイントを交えつつ黒い雨に迫る。
双剣が襲い来るワイヤーブレードを弾く。火花が飛び散る中、踊るように攻撃をかいくぐっていく。
後、一歩。
左に捻った体勢から勢いを殺さず右への回転切り二連斬がラウラを襲う。
――筈だった。
「甘い」
目の前に右の掌が突き付けられる。体が……動かない。
「それはお互いさまじゃない？」
「何？」
カツンッ――
ラウラの背中に突き付けられたビット。
「……」
「……」
お互いに沈黙。
「やれやれ、お前たちは一体いくつ面倒事を起こせば気が済むんだ」
間に割って入ったのは有ろうことか生身の人間。我らが織斑先生だ。

「織斑先生……」
「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーを破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」
「教官がそう仰るなら」
ラウラはそう言ってＩＳを解除した。同時にＡＩＣの拘束が解け、ようやく楽な体勢になった。
ちらりと一夏に目配せする。一夏は意図を汲み取って一度頷いた。
「ああ、それで構わない」
仲間を思う一夏の顔はとても頼もしく見えた。

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

シュヴァルツェア・レーゲン―黒い雨―（後書き）

今回はいつものように本を片手に書かなかったので割とテキトーだったり。
コメント御持ちしております。
本当に読んでくれている人がいるのか不安になるのと、反応のなさから更新を先延ばしにしがちだったり……。
豆腐メンタルなもので。

ラウラ・ボーデヴィッヒだ。
こんな島国の呑気な学校など……教官には相応しくない。
やはりあの男がいるせいだ。
次回「ペア・パートナー―学年別『タッグ』―」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2010s/

IS〈インフィニット・ストラトス〉 天の悪戯

2011年10月1日12時43分発行